市はなぜたつのか
雲南国境地帯の定期市を事例として

Why is a Market Established ? : The Example of Regular Markets on the Border of Yunnan Province

西谷 大

はじめに
❶問題の所在
❷6日ごとの市
❸考察
❹まとめ—市のたつ条件とその特質—

[論文要旨]

本稿は中国雲南省紅河州の金平県と緑春県で街道沿いに6日ごとにたつ市を事例として，市が成立する上で普遍的に必要となる条件と特質をさぐることを目的としている。

これまで市を成立させる条件として「余剰生産物の現金化と生活必需品の購入」，「徒歩移動における限界性」，「市ネットワークの存在と商人の介在」，「商品作物の処理機能」の4つ条件を提示した。本稿では市のもつ特質として，「小商いの集合による商品数の創出と多様な選択性」，「生産物の処理の自由度と技術の分担による製品の分業創出」を付け加えた。さらに市の成立を考える上で，「交易品としての食料と食の楽しみ」と「店と人数の適正規模」にも目を向ける必要があることを指摘した。

人類の歴史上における交易活動の出現は，生業や生態学的な環境の相違によって生産物などが異なる集団間で，物資の交換がおこなわれたことが契機になることがしばしば認められる。言語，習慣，生産物などの異なる9つの民族が1つの谷に居住する者米谷地域での定期市の研究は，人類の歴史上で市が誕生する条件や異民族間の交易によって市が誕生していく過程を考える上で，重要なヒントを与えてくれると考えられる。

はじめに

中国雲南省紅河哈尼族彝族自治州（以下紅河州）に属する金平苗族瑤族傣族自治県（以下金平県）と緑春県では，街道沿いに6日ごとに市がたつ。金平県と緑春県における6日ごとの市は，歴史的には少なくとも清代末期にまでさかのぼることができる。しかし1960年代から70年代にかけて，中国政府の方針である農業の集団化にともなって強制的に停止させられた。ところが1980年代になって農業の生産請負制がはじまると6日ごとの市は再び開催され，この地域の人びとの生活にとって必要不可欠な存在になっている。

ではなぜ金平・緑春県では，6日ごとの市が復活し盛況を呈しているのだろうか。筆者は，先に著した2つの論考において，金平県の定期市の歴史とそのシステムを明らかにしつつ，地域社会における定期市の必要性と影響について論じた［西谷2005a，b］。本稿では，この地域の市システムをより深く理解するため，先の論考では詳細に叙述できなかった複数の市について分析と比較をおこないつつ，市が成立する上で普遍的に必要となる条件と特質をさぐることを目的としている。

❶……問題の所在

市に関する研究史は，これまでの論考で述べてきた。ここではこれまで筆者がおこなってきた市研究の成果をふまえながら，市を研究する上で問題になる点を指摘したい。

中国における市の研究は戦前にまでさかのぼる。市は経済活動が集約された場所という視点から中国経済史の加藤繁が調査をおこなっているが，それだけでなく中国農業史の天野元之助，東洋史の増井経夫などが市の研究をおこなっている[(1)]。その研究は伝統中国において市は，地域の住民の日常生活に重要な機能をはたしているという視点から出発している。そして彼らの研究から，中国の市は数ヶ村ごとにもたれている日雇い市から県全体に及ぶ家畜市まで，大小さまざまな市場圏が重なり合いながら分布していたことが明らかにされていった。さらに中国の市は，地域の住民が市を利用して物資を売買することに対して極めて開放的であり，国家の権力やある特定の団体が介在していないことが指摘された。

スキナーは四川省における市調査から日本人研究者による市研究を発展させ，市が規模によって階層性をもちつつ空間的に分布していると主張した。そして市の立地と分布を，距離と人口密度と交通手段などから説明しようとする，歴史地理学の中心理論[(2)]によって解き明かそうとした。さらに中国農村の特質は「中国の農民は閉鎖的な世界に住んでいたといわれるが，その世界とは村落ではなく標準市場社会のことである。農民の実際の社会範囲は，村の狭い境界線よりむしろ標準市場圏の境界線によって規定されている」と，伝統中国の農民の生活が市場圏によって規定されていると主張した[(3)(4)]。

しかしアジア経済史を専門とする黒田明伸によって，スキナーの説には反論が加えられている［黒田2003］。黒田によると財の集散の動きに着目すると，定期市はあくまで流通のさまざまな節のどこかの1つにしかすぎず，市場圏といった経済的な空間は存在しないという。そして伝統中国

の市は戦前の日本人研究者が指摘したように，行政機能の集権性の外観とは裏腹に，国家の権力とか閉鎖的団体によっても規制されず個々の経営者たちによって自由に形成されていたと説明する。

筆者も先に著した2つの論考で，市は村民と小商人と商品の動きというミクロな視点でみると，物資の動きを円滑にするためのシステムであり，スキナーが主張するように市グループがまとまりをもった1つの社会的空間を形成しているとはいえないと述べた。また現在金平県でおこなわれている6日ごとの市のシステムは，物資の流通と売買にとっては効率的なシステムにみえるが，反対に地域社会の村民側にたてば，余剰生産物の処理と生活必需品の購入が市によって制限されていることも指摘した。さらに市は経済的な活動以外に，それを成立させ維持させている要素として，市に埋め込まれた遊びや楽しみやよろこびといった，市に人を引きつける魅力も重要であると主張した。

さて中国の辺境に位置する金平県で実施している定期市の調査研究は，この地域の社会を理解することだけを目的にしているのではない。人類の歴史上で市が誕生する条件や異民族間の交易を考えていく上で，金平県の市で抽出した市の成立条件は普遍性をもっているのではないかと考えている。定期市は，市という場での交易活動が基本になってはじめて成立する。人類の歴史上における交易活動の出現は，生業や生態学的な環境の相違によって生産物などが異なる集団間で，物資の交換がおこなわれたことが契機になることがしばしば認められる。それぞれの言語，習慣，生産物などが異なる9つの民族が1つの谷に居住するこの地域での定期市の研究は，交易によって市が誕生していく過程を考える上で，重要なヒントを与えてくれると考えられる。

本稿ではこのような視点にたちつつ，先の2つの論考では詳細にふれることのできなかった者米の近隣でたつ4つの市と，乾季にたつ者米の市の分析をおこない，これまで主張してきた市が成立する条件とシステムについての補足をおこなう。[5]

❷…… 6日ごとの市

1 調査地と市

金平県と緑春県は，雲南省の省都である昆明の南およそ250㎞に位置し（図1），南側の県境はヴェトナム国境と接している。金平県の面積は，およそ3686平方㎞であるが，そのうち99.78％が山地で，平地面積は10.14平方㎞と，わずかに0.22％にすぎない。村や町は河谷沿いのわずかな平坦地か，または尾根上の比較的傾斜の緩やかな土地に作られる。金平県の中心である金平鎮は，標高およそ1200ｍの山間に作られた人口およそ4万人の町で，周囲は標高2000ｍ級の山並みに囲まれている。金平鎮の西に位置する緑春県の面積は，およそ3096平方㎞であるが，金平県と同様に山地が卓越しており，標高1200ｍ以上の面積が県のおよそ3分の2を占める。調査をおこなった5つの市は金平県から緑春県を東西に貫く街道沿いの町でたつ。行政区では東から金平県勐拉郷の西部に位置する螞蟥塘と金平県者米拉祜族郷内では東から三棵樹・頂青・者米で，緑春県内においては県東部に位置し金平県に隣接する平河区平河郷に所在する平河の5つの町である。

蟆蟥塘が位置する勐拉郷の西部は標高およそ800～1000 mの山地が連続するが，それを過ぎると地形は一変し，西北から東南に流れる者米川とその南北に河谷平地が広がる。者米川の南側が者米拉祜族郷で北側が老集寨郷[6]である。河谷沿いの平坦な土地は，南北幅わずか2～3 kmと狭く標高はおよそ500 m前後である。それに対して，河谷平地の南北両側は，急峻な山地がせまるが，北と南でその地形が若干異なる。北側の老集寨郷では，1200～1800 mの山が郷全体に散在し，尾根は者米川に向かって南北に走る。者米川の南では，ヴェトナムとの国境を区切る2000 m前後の脊梁山脈が西北から東南へ屏風のように連なる。標高3074 mの西隆山は，ヴェトナムとの国境にまたがる金平県の最高峰である。南北2つの郷をあわせると，東西およそ40 km，南北およそ25 kmの広さがあり，河谷平地と山地をあわせたこの地域を者米谷と呼ぶことにする。者米谷の河谷平地を東西に貫く街道沿いには，東から順に三棵樹・頂青・者米で市がたつが，このなかでは者米が

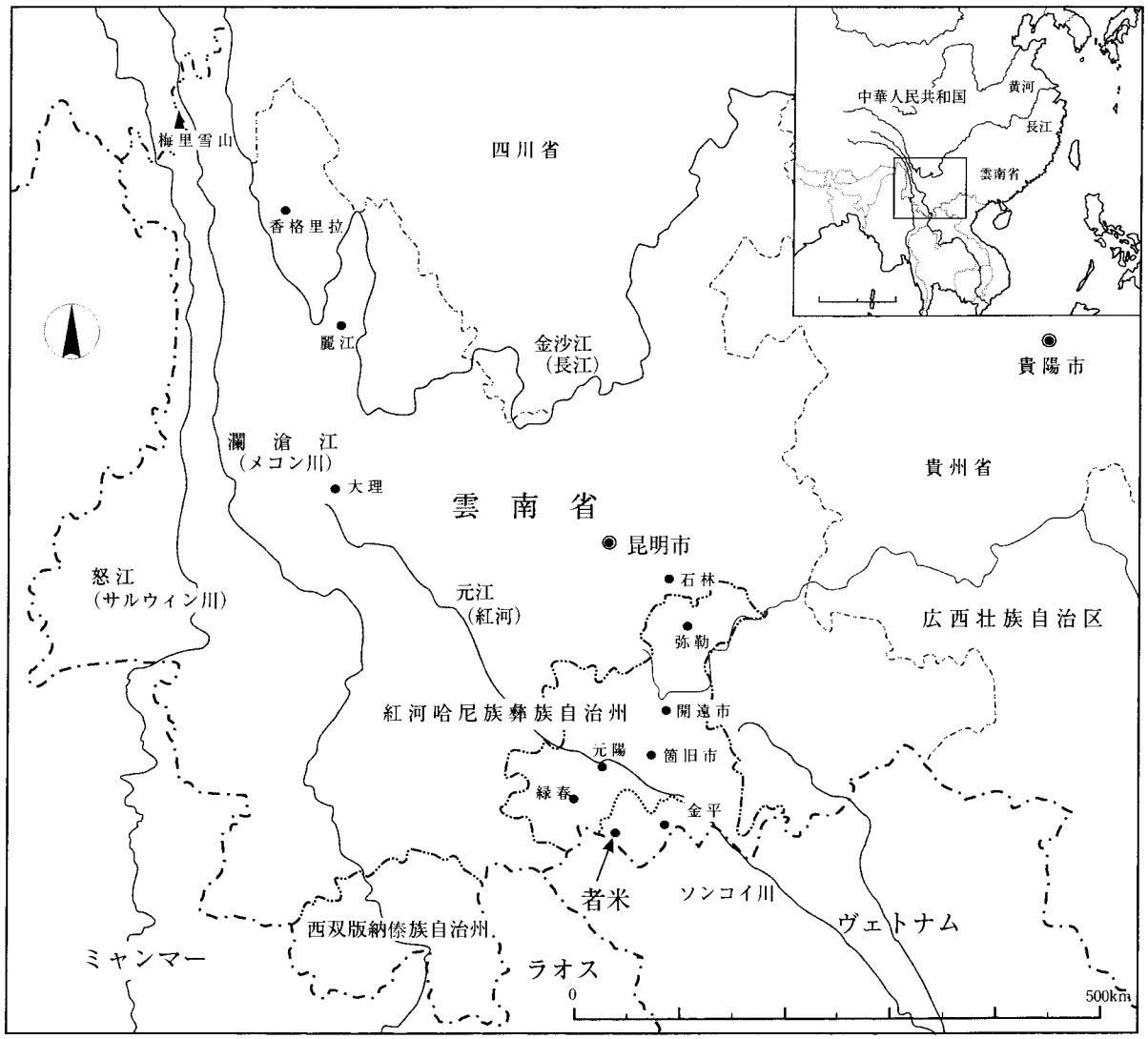


図1　調査地

人口おおよそ1000人を数え最も大きな町であるとともに，者米拉祜族郷の郷政府がおかれている。者米を過ぎて街道をさらに西に進み，緑春県に入るとまもなく道は山地をぬうようにして登る。そして道が尾根に達した，標高およそ1100 mの高地に平河がある。者米から西に直線距離にしておよそ17 kmの地点である。

金平県勐拉郷の西部から者米拉祜族郷，老集寨郷，および緑春県平河区にかけては，タイ，ハニ，ヤオ，クーツォン，アールー，ミャオ，ジョワン，ハーベイ，漢の9民族が居住する[7]。緑春県の平河区には90の自然村[8]があり，人口は21594人を数える［雲南省緑春県志編纂委員会1985］。そのうちハニ族が18858人と87.3％を占める。その次に人口が多いのがヤオ族で，2234人（10.3％）である。者米谷の南の者米拉祜族郷は，57の自然村があり，人口は18512人（2002年）を数える。そのうち5525人がラフ族の一支族であるクーツォン族であり，ほぼ人口の3分の1を占める。者米拉祜族郷にはクーツォン族以外に，タイ・ジョワン・ハニ・ヤオ・ミャオ・ハーベイ族が居住する。者米谷の北側の老集寨郷は，72の自然村があり人口は22841人を数える。老集寨郷にはハニ・アールー・ミャオ・タイ族が居住する［雲南省金平苗族瑤族拉祜族自治県志編纂委員会1994］。

今回調査した西の平河から東の螞蟥塘までの地域では，民族によって居住する位置に差異がある（図2）。先ほど述べたように平河周辺ではハニ族が多く住む。者米谷では，河谷沿いの平地に居住するのが，タイ族とジョワン族である。者米谷の南の者米拉祜族郷では，ハニ族の村が郷の西部と東部に集中する。その間に挟まれるように，クーツォン族の村が分布する。郷内におけるヤオ族の村は6村と少ないが，いずれも郷の東部に村が集中する。ハーベイ族[9]の村は，郷の東部に位置する小翁幇川を2時間ほどさかのぼったところにある。ハーベイ族が居住する村は，者米谷の1カ所だけである。者米谷の北側の老集寨郷では南の者米拉祜族郷と同様にハニ族は西部と東部に分布し，それに挟まれるようにしてアールー族の村が分布する。一方，ミャオ族は，者米拉祜族郷と老集寨郷の東部から勐拉郷の螞蟥塘周辺に多く居住する。

各民族の居住方式は平面的な分布の相違に加えて，高度による差異も認められる。タイ族は，河川沿いの平地を水田にして二期作をおこなう。また河川敷も水田だけでなく，トウガラシ畑などにして利用している。かつては河川での漁撈も盛んだった。そして南北に広がる山の斜面の標高およそ800 m付近まで，パラゴムの植林をおこなっている。それより高い尾根上や山の斜面に，ミャオ，ハニ，アールー，ヤオ，クーツォン族が居住している。

山地に住む民族を比較すると，ミャオ族の村は標高800 m以下の場合が多い。ハニ族の村は，標高およそ800～1000 mの範囲に分布するのに対して，ヤオ族とアールー族は標高およそ1000～1300 mの間に居住する。ヤオ族は1990年代までは焼畑もおこなっていたが，現在はいずれの民族も棚田による水田耕作が生業の中心である。クーツォン族は1950年代まで，標高およそ1300 m以上の山地に住み，焼畑と狩猟採集を生業としていた。しかも毎年耕作場所と村を変える，移動型焼畑農耕民だった。現在は政府主導のもとでおこなわれている「扶貧政策」によって，従来の居住地域だった山地から標高1300 m以下の尾根上の土地に移住させられ，棚田による水田耕作をおこなっている[10]。

調査地域は者米谷の東西に長く狭い河谷平地と，その周囲に広がる山地からなる複雑な地形を特徴としている。それにあわせて気候も多様である。それだけでなく居住する民族数も多く，各尾根

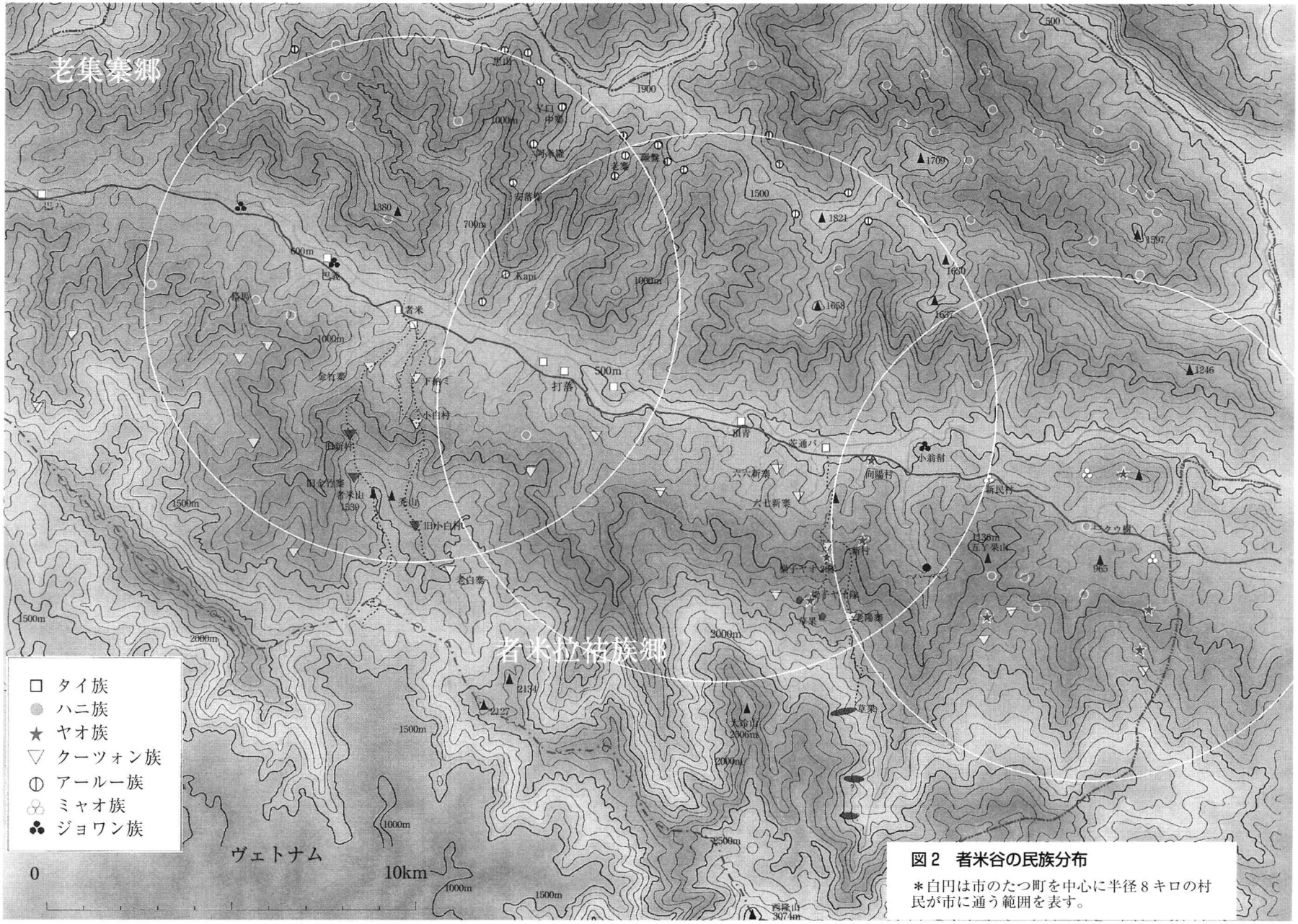


図2　者米谷の民族分布

＊白円は市のたつ町を中心に半径8キロの村民が市に通う範囲を表す。

にある村々が異なった民族で構成されることがしばしばあるという特徴をもっている。5つの市が，この地域の複雑な地形・多様な民族・生業の多様性とどのように関係しながら開催されているのかを，各市の立地，規模，露店の種類，市で販売される青果類などに着目しながら論じたい。

2 螞蟥塘の市

a 町の位置と露店の分布

螞蟥塘は，今回とりあげる5つの市のなかでは，もっとも東に位置する。者米の市日を第1日目とすると，第2日目にたつ市である。螞蟥塘は，者米から直線距離にして東におよそ26 kmの位置にあり，標高およそ672 mと者米谷の河谷平地と比較すると170 mほど高い地点にある。

螞蟥塘の市は，東西に走る街道沿いからほぼ真南に延びる道で開催される（図3[11]）。この道は幅およそ14 mあり本通と呼んでおく（写真1）。本通は100 mほどで行き止まりになるが，入口から15 mほど南に入ったところに東南に延びる脇道が接続する。道はおよそ20 m延びたところで行き止まりになっている。この脇道の両側でも露店がたつ。街道と本通が接する市の入口付近には，果実を販売する露店が並ぶ（№24～29）。市の入口の東側に食堂が1軒あるが，この周囲に野菜を売る露店が店をだしている。№34，35はハニ族が，№42～45はミャオ族が野菜を販売する露店である。東南に延びる脇道の北側にはブタ肉と魚を扱う露店が並ぶ。本通のおよそ60 mの区間は，タバコ，雑貨，豆腐，マントウなどを販売する露店が混在して並んでいる。その南側のおよそ25 mの区間は，衣料を扱う露店だけが集中している。

このように螞蟥塘の市における露店を分布は，市の入口から順にみると，本通の青果・野菜→雑貨・食品→衣料，脇道での肉・魚となり，商品のカテゴリーによって露店がグループを作りながら分布していることがわかる。

b 露店の種類

2004年10月20日における市の露店の出店数は，94店であり平日も営業している常設店は10店であった（表1）。このうち常設店の内訳は，食堂（8店），雑貨店（1軒），コメの仲買・雑貨店（1軒），キャッサバの仲買（1軒）（写真2）である。露店の分類は，者米の市でおこなった方法を基準にした（西谷2005b[12]）。露店を特定のカテゴリーの商品の販売や，サービスをおこなう専門店と雑貨店で分類すると，専門店が67店（71.3％）を占め，雑貨店は27店（28.7％）となる（表2）。専門店では食品に関する露店が31店と最も多く，全体の33.0％を占める。以下，生活用品（24店，28.7％），嗜好品・趣味（11店，11.7％）という比率であった。螞蟥塘の市では，家畜販売と医療品を販売する露店やサービスに関わる露店は出店していなかった。

食品を専門に販売している露店の内訳は，野菜（14店，14.9％），果物（2店，2.1％），ブタ肉屋（5店，5.3％），飲食店（6店，6.4％），食材（2店，2.1％），魚屋・駄菓子（1店，1.3％）の順であった。生活用品を専門に販売している露店のうち，扱っている商品は衣料・靴・金物の3種類である。店数の多いものから，衣料（17店，18.1％），靴（5店，5.3％），金物（2店，2.1％）となる。者米の市で専門店として扱っていた，ライター，文房具，洗面用具，台所，玩具，ビニールテーブルクロス，寝具という商品群の販売はなかった。

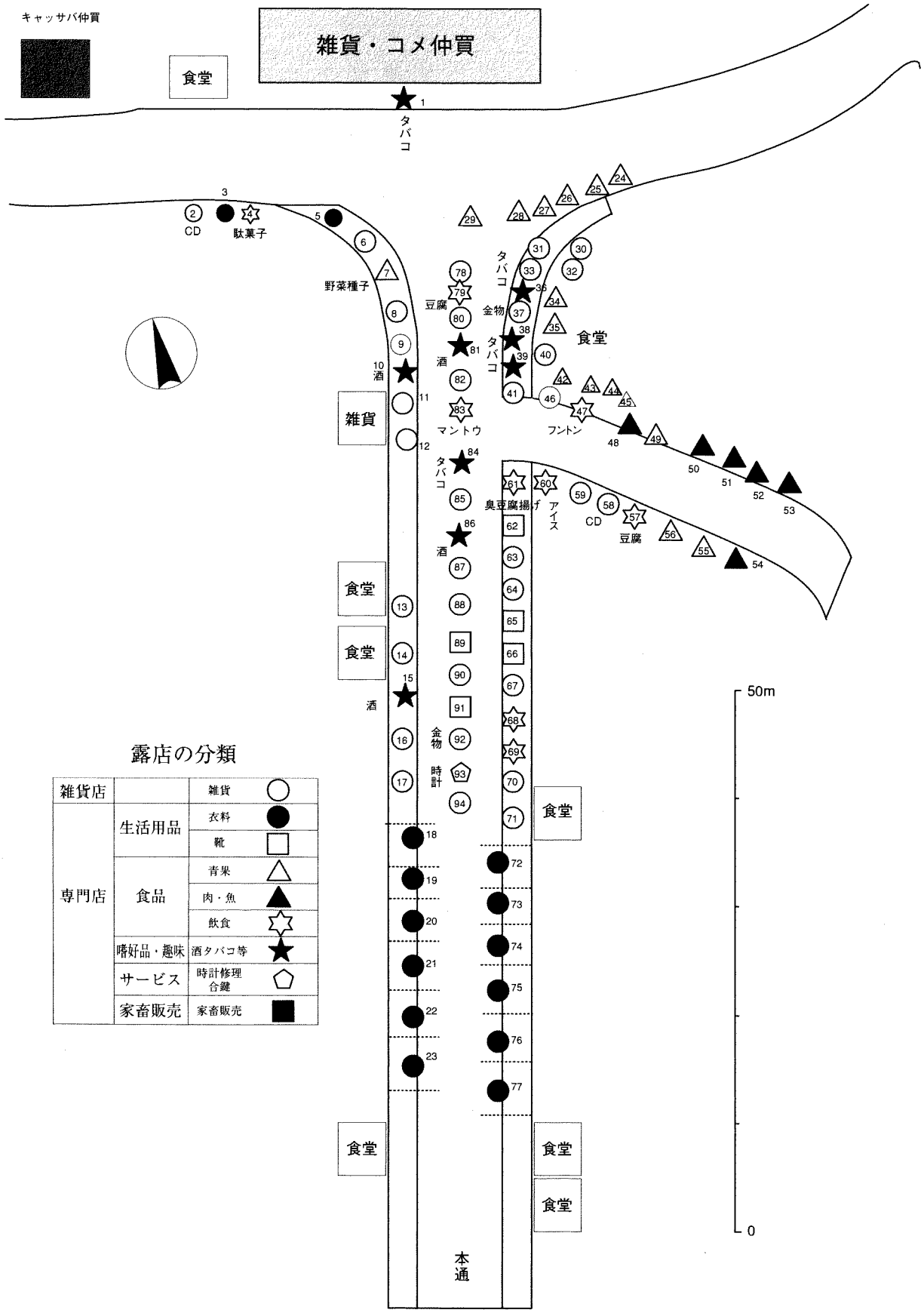

キャッサバ仲買
雑貨・コメ仲買
食堂
タバコ
CD
駄菓子
野菜種子
豆腐
酒
雑貨
マントウ
金物
フントン
臭豆腐揚げ
アイス
CD
豆腐
食堂
時計
本通
50m
0
露店の分類
雑貨店
専門店
生活用品
食品
嗜好品・趣味
サービス
家畜販売
雑貨
衣料
靴
青果
肉・魚
飲食
酒タバコ等
時計修理
合鍵
家畜販売

図3　螞蟥塘の市

表1　常設店の比較

分類	店の名称	者米	三棵樹	頂青	螞蟥塘	平河
日用品	日用品中心の雑貨	13（16.3%）	—	—	1	12
	衣料中心の雑貨	20（25.0%）	—	—	—	2
	飼料	4（5.0%）	—	—	—	—
	金物	4（5.0%）	—	—	—	—
	電化製品	2（2.5%）	—	—	—	—
	農業資材	1（1.3%）	—	—	—	—
	靴	2（2.5%）	—	—	—	1
	家具	1（1.3%）	—	—	—	—
	スレート（屋根材）	1（1.3%）	—	—	—	—
	自動車部品	—	—	1	—	—
食料品	食品中心の雑貨	8（10.0%）	—	—	—	—
	酒	1（1.3%）	—	1	—	—
	駄菓子	—	—	1	—	—
薬	薬	2（2.5%）	—	—	—	1
飲食店	食堂	15（18.8%）	6	7	8	5
サービス	カラオケ	1（1.3%）	—	—	—	—
	写真屋	1（1.3%）	—	—	—	—
	遊技場	—	1	—	—	1
仲買	レモングラス仲買	1（1.3%）	—	—	—	—
	キャッサバ仲買	1（1.3%）	—	—	1	—
	綿仲買	1（1.3%）	—	—	—	—
	草果仲買	1（1.3%）	—	—	—	—
	計	80（100.0%）	7	10	10	22

その他の嗜好品・趣味に関わる店の内訳は，タバコ（5店，5.3％），酒（4店，4.3％），音楽テープ・CD・VCD（2店，2.1％）となる。螞蟥塘の市の特徴は，サービスや家畜販売に分類した露店は出店していないことと，後で述べるが三棵樹や頂青ではみられないキャッサバの仲買店が存在することである。

c　青果

青果を販売しているのは，市の入口付近（№24～29）と，入口の東側にある食堂周囲（№34～35，42～45），そして脇道の北側と南側（№49，55，56）で商売をしている15軒である。このうち，№34，35の2店がハニ族の店であり，№42～45の4店がミャオ族の店である（写真3）。他の市では青果を販売している店が，露店全体のおよそ30％を占めるという共通した傾向を示す。ところが螞蟥塘の場合，青果を販売している露店は全体の19.5％と低いことが特徴として指摘できる。

野菜の種類は27種で，最も多くの露店で売っていた野菜はハクサイ（6店）である。以下，トウガラシ・セリ・ジャガイモ（それぞれ4店），青菜（3店），ササゲ・ピーマン・トマト（各2店）の順になる。ハニ族とミャオ族が販売する野菜の種類を比較すると，ミャオが扱う野菜の種類は，トウガラシ，ショウガ，タロイモと3種類である。一方，ハニ族は，青菜，タケノコ，ニラ，

コンニャクなど10種類と多い。このようにハニ族とミャオ族とは，販売している野菜の種類が異なっていることがわかる。

また民族を不明とした露店のグループ[13]が販売している野菜は，いずれも螞蟥塘周辺の農民が生産している野菜ではなく，勐拉や金平などの市で買い付けてきたものである。このように螞蟥塘の市で青果を扱う露店は，各民族単位で販売する野菜の種類が異なる。

d　市の人数と民族構成

市において，滞留人数が最も多くなるのは10時30分ごろであり，その人数は386人（男190人，女196人）だった。このうち女性を民族ごとに分類した。その内訳は，ミャオ族が115人（58.7％），ハニ族が36人（18.4％），ヤオ族が10人（5.1％），クーツォン族が5人（2.6％），不明30人（15.3％）と，ミャオ族が占める割合が最も高い。

3　三棵樹の市

a　町の位置と露店の分布

三棵樹は螞蟥塘から西に7.5㎞に位置し，者米からみると東に18.5㎞の地点にある。者米で市がたつ日を第1日目とすると第5日目に開催される。三棵樹は，南西から北東に走る街道の南側に広がる町である（図4）。町には，街道沿いの2つの入口から入る。この2つの道路は，およそ50 mのところで再度合流し1本の道になって南におよそ70 m続くが，その先は崖で行き止まりになっている。

市日には街道沿いの両側[14]と，町に入る2つの入口から延びるおよそ50 mの区間，さらに合流して1本の道になり南に延びるおよそ50 mの区間に，雑貨，衣料，靴，タバコ，食品を扱う露店が混在して並ぶ（写真4）。さらにその先のおよそ30 mの区間には青果を販売する露店が並び，崖の手前の道路が肉・魚の売り場になっている。露店は街道からみて市に入る地点から，雑貨・衣料など→青果→肉，魚の順になり，商品のカテゴリーによって露店がグループを作りながら分布している。

b　露店の種類

2004年6月5日の市において，市日にだけ営業する露店は146店で，平日も開店している常設店は7軒を数えた（表1）。このうち常設店の内訳は，食堂（6軒），遊技場（1軒）である。露店のうち特定のカテゴリーの商品の販売やサービスをおこなう専門店が121店（82.9％）を占め，雑貨店は25店（17.1％）となる（表2）。専門店を，生活用品，食品，嗜好品・趣味，サービス，医療品，家畜販売の6つに分類すると，食品関係の露店が71店と最も多く，全体の48.6％を占める。以下，生活用品（31店，21.2％），嗜好品・趣味（13店，8.9％）という比率であった。三棵樹の市では，家畜販売と医療品を販売する露店はなかった。専門店を6分類したうち食品を扱う露店は，その内訳から野菜（34店，23.2％），果物（8店，5.5％），肉屋（8店，5.7％），飲食店（9店，6.2％），食材（4店，2.7％）魚屋（2店，1.4％）の順になる。生活用品を扱う露店を6分類したうち，衣料を扱う露店が最も多く19店（13.0％）を占める。以下，靴（10店，6.8％），金

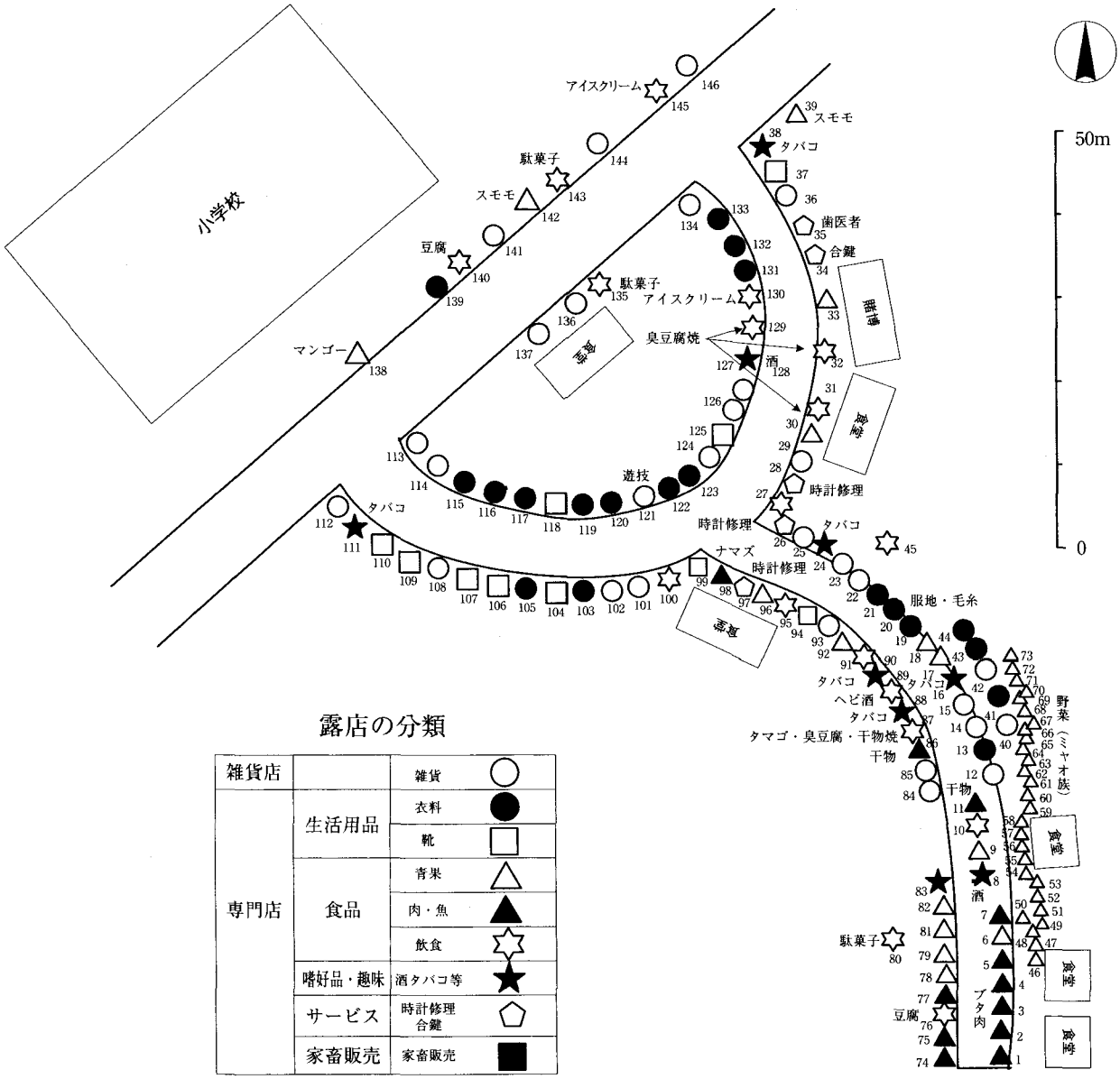


図4　三棵樹の市

物（2店，1.4％）となる。者米の市で専門店として扱っていた，ライター，文房具，洗面用具，台所，玩具，ビニールテーブルクロス，寝具という商品群の販売はなかった。その他の，嗜好品・趣味に関わる店の内訳は，タバコ（6店，4.1％），酒（3店，2.1％），音楽テープ・CD・VCD（4店，2.7％）で，サービスに分類した露店のうち，時計修理は4店（2.7％），歯医者（1店，0.7％），遊技（1店，0.7％）となる。

表2　露店の比較

分類			者米		三棵樹		頂青		螞蟥塘		平河	
雑貨店		雑貨	66	22.5%	25	17.1%	33	34.7%	27	28.7%	47	20.5%
専門店	生活用品	衣料	31	10.6%	19	13.0%	11	11.6%	17	18.1%	22	9.6%
		靴	7	2.4%	10	6.8%	—	—	5	5.3%	3	1.3%
		洗面用具	3	1.0%	—	—	—	—	—	—	—	—
		台所	3	1.0%	—	—	—	—	—	—	—	—
		ライター	2	0.7%	—	—	—	—	—	—	1	0.4%
		金物	2	0.7%	2	1.4%	—	—	2	2.1%	1	0.4%
		布	1	0.3%	—	—	—	—	—	—	—	—
		文房具	1	0.3%	—	—	—	—	—	—	1	0.4%
		おもちゃ	1	0.3%	—	—	—	—	—	—	—	—
		ﾋﾞﾆｰﾙﾃｰﾌﾞﾙｸﾛｽ	1	0.3%	—	—	—	—	—	—	—	—
		寝具	1	0.3%	—	—	—	—	—	—	—	—
	食品	野菜	63	21.5%	34	23.3%	24	25.3%	14	14.9%	64	27.9%
		果物	24	8.2%	8	5.5%	6	6.3%	2	2.1%		
		肉屋	15	5.1%	8	5.5%	7	7.4%	5	5.3%	8	3.5%
		飲食	20	6.8%	9	6.2%	1	1.1%	6	6.4%	27	11.8%
		食材	9	3.1%	4	2.7%	4	4.2%	2	2.1%	9	3.9%
		魚屋	3	1.0%	2	1.4%	1	1.1%	1	1.1%	1	0.4%
		駄菓子	—	—	6	4.1%	—	—	1	1.1%	3	1.3%
	嗜好品 趣味	タバコ	17	5.8%	6	4.1%	2	2.1%	5	5.3%	19	8.3%
		酒店	6	2.0%	3	2.1%	2	2.1%	4	4.3%	3	1.3%
		音楽ﾃｰﾌﾟ, CD, VCD	4	1.4%	4	2.7%	1	1.1%	2	2.1%	1	0.4%
	医療品	薬	2	0.7%	—	—	—	—	—	—	—	—
	サービス	合鍵	1	0.3%	—	—	—	—	—	—	—	—
		時計修理	4	1.4%	4	2.7%	—	—	1	1.1%	1	0.4%
		歯医者	—	—	1	0.7%	—	—	—	—	1	0.4%
		賭博	—	—	1	0.7%	—	—	—	—	—	—
		その他	—	—	—	—	—	—	—	—	2	0.9%
	家畜販売	家畜販売	6	2.0%	—	—	3	3.2%	—	—	15	6.6%
		計	293	100.0%	146	100.0%	95	100.0%	94	100.0%	229	100.0%

c　野菜・果実

青果を販売していた露店の位置は，図5の№30，33，46～73，78，79，81，82，92，96，138，142である（写真5）。ブタ肉を販売する露店や，雑貨，衣料を扱う露店は市の入口から最も遠い道路の終点近くに集中している（№1～7）。青果のうち野菜を販売する露店は，この道路の東側の露店とその背後にある食堂の間に密集して店を開いていた（№46～73）。雑貨やブタ肉を販売する露店はいずれも台売りであるが，野菜を売る露店は地べた売りである。野菜の露店販売の民族ごとの内訳は，ミャオ族が28店（82.4％），ハニ族が2店（5.9％），不明が4店（11.8％）である。三棵樹の市の野菜販売は，そのおよそ8割をミャオ族が占めていることが特徴である。

野菜の種類は20種[15]で最も多くの露店で売られていた野菜は，キュウリ（24店）である。以下，トウガラシ（19店），インゲンマメ（14店），青菜（6店），カボチャ（6店），ナス（4店），トウモロコシ（2店）の順になる。果実は，スモモを販売している露店が6店と最も多い。以下，バナ

ナ（3店），モモ（2店），マンゴー（2店）の順になる。

ハニ族とミャオ族が販売する野菜の種類を比較すると，ミャオ族が扱う野菜は，キュウリが24店（32.9％）と最も多い。以下，トウガラシ（19店，26.0％），インゲンマメ（9店，12.3％），青菜（6店。8.2％），カボチャ（5店，6.8％），ナス（3店，4.1％），トウモロコシ（2店，2.7％），洋糸瓜（1店，1.4％），ディル（1店，1.4％），ニラ（1店），タケノコ（1店），ショウガ（1店）となる。一方ハニ族が販売する野菜は，カリフラワー（1店），ジャガイモ（2店），キャベツ（2店），ハクサイ（2店）である。

このように三棵樹の市でも民族ごとに販売する野菜に特徴があり，特にミャオ族とハニ族の販売する野菜を比較すると種類が全く異なることが指摘できる。

d 市の人数と民族構成

6月5日の三棵樹の市において，市の滞留人数が最も多くなるのは，10時30分ごろであり，587人である。その内訳は，男性が307人（52.3％），女性が280人（47.7％）であった。このうち民族を，女性の衣装によって分類した。その内訳は，ハニ族が125人（44.6％），ヤオ族が50人（17.9％），ミャオ族35人（12.5％），不明70人（25.0％）と，ハニ族が市に集まる客のうち最も多い（写真6）。

4 頂青の市

a 町の位置と市における露店の分布

頂青は三棵樹の西およそ10㎞に位置し，者米からみると東に8.5㎞の地点にある。者米で市がたつ日を第1日目とすると第3日目に開催される市である。[16] 頂青は河谷平野を東西に走る街道沿いと，南から流れ込む小河川との合流点にできた町である。町の中心は，街道と直角に交わり北に250 mほど延びる道路沿いであり市もここにたつ。

街道と直角に交わる市の入口付近は，東西50 m，南北30 mの三角形状の広場を呈している（図5）。この場所では，ブタ肉，アヒル・ニワトリのヒナ，イヌ肉，魚（コイ・ナマズ）などの露店がたつ（写真7）。道は北におよそ65 m延びたのちに，北東方向に向かって120 mほど直線の道が続く。この道路沿いのおよそ100 mの区間に，雑貨，衣料，タバコ，豆腐，駄菓子，CDなどを販売する露店が混在して並ぶ。売り方はいずれも台売りである。それを過ぎたあたりから，露店による野菜売り場になる。売り方はすべて地べた売りである。このように市の露店は，入口から肉・魚→雑貨→青果という順番で，螞蟥塘や三棵樹の市と同様に商品のカテゴリーによってグループを作りながら分布していることがわかる。

b 露店の種類

2004年5月27日における市の出店数は，95軒であり常設店は10軒だった（表1）。このうち常設店の内訳は，食堂（7店），駄菓子（1店），自動車部品（1店），酒屋（1店）である。露店では特定のカテゴリーの商品の販売や，サービスをおこなう専門店が62店（65.3％）を占め，雑貨店は33店（34.7％）である（表2）。専門店は食品関係の露店が43店と最も多く，全体の45.3％を

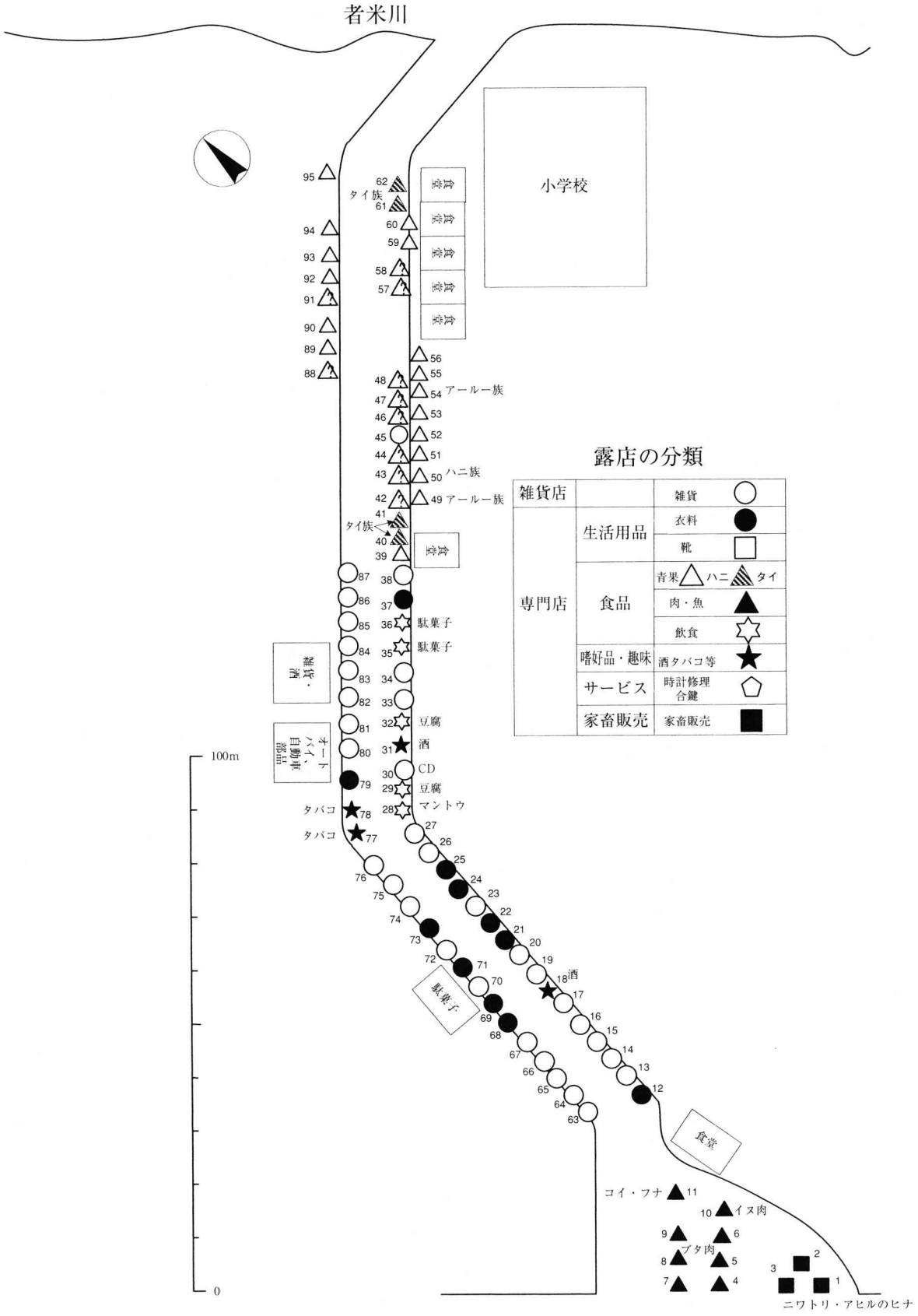

者米川
小学校
食堂
タイ族
アール一族
ハニ族
駄菓子
豆腐
酒
CD
マントウ
タバコ
自動車部品
100m
0
コイ・フナ
イヌ肉
ブタ肉
ニワトリ・アヒルのヒナ
露店の分類
雑貨店
専門店
生活用品
食品
嗜好品・趣味
サービス
家畜販売
雑貨
衣料
靴
青果
ハニ
タイ
肉・魚
飲食
酒タバコ等
時計修理
合鍵
家畜販売

図 5　頂青の市

占める。以下，生活用品（11 店，11.6 %），嗜好品・趣味（5 店，5.3 %），家畜販売（3 店，3.2 %）という比率だった。食品を扱う露店は，野菜（24 店，25.3 %），果物（6 店，6.3 %），肉屋（7 店，7.4 %），飲食（1 店，1.1 %），食材（4 店，4.2 %）魚屋（1 店，1.1 %）の順である。

生活用品を扱う露店は，者米の市の商品群の分類を参考にすると，衣料，靴，ライター，金物，布，文房具，洗面用具，台所，玩具，ビニールテーブルクロス，寝具の 11 に分類した。ところが頂青の市では，生活用品のカテゴリーに属する 11 店は，すべて衣料を扱う露店であり，他の 10 種類の商品を販売する露店は出店していなかった。そのかわり衣料以外の商品群は，雑貨店で販売されていた。その他の嗜好品・趣味に関わる店の内訳は，タバコ（2 店，2.1 %），酒（2 店，2.1 %），音楽テープ・CD・VCD（1，1.1 %）となる。家畜販売は，3 店（3.25 %）であった。また頂青の市ではサービスに分類した合鍵，時計修理，歯医者といった露店は出店していなかった。

c 青果

野菜・果実を販売する露店は，街道から頂青の北に延びる道を 130 m ほど入ったところからはじまり，道路の左右およそ 80 m の区間に集中する。図 5 の№ 39 ～ 62，№ 88 ～ 95 が青果を販売した露店である（写真 8）。このうち，№ 47，48，57，58，59，92 が果実を販売する露店である。野菜・果実の露店販売の民族ごとの内訳は，ハニ族が 13 店（43.3 %），タイ族が 4 店（13.3 %），アールー族が 2 店（6.7 %），ヤオ族 2 店（6.3 %），不明が 11 店である。野菜の種類は 27 種[17]で，ニラ（10 店）が最も多くの店で売られていた。以下多順に，トウガラシ（7 店），高菜（6 店），ハクサイ（4 店）），ジャガイモ（4 店），インゲンマメ（4 店），カボチャの葉（3 店）となる。

野菜・果実の販売を民族ごとに比較すると，タイ族は，トウガラシ，ハクサイ，ジャガイモ，インゲンマメといった野菜を販売する。このうちトウガラシは，タイ族が自家栽培をおこなっているが，その他の野菜は勐拉や金平などの市で仕入れてきたものである。一方ハニ族が扱うニラ，高菜，カボチャ，マンゴウといった野菜と果実は，自分たちの村の周囲の菜園畑で栽培されたものである。アールー族が扱っている野菜は，ハニ族とタイ族と共通するトウガラシを除くと，イチジク，ナスといった他の民族が販売していない種類を扱っていた。頂青の市でライチを販売していたヤオ族は，およそ 10 km離れた向陽村から来ている（写真 9）。販売しているライチは，自家栽培のものである。このように野菜の種類は民族によって異なっていることが指摘できる。

d 市に集まる人数

頂青の市に参加する人数を調べると[18]，10 時で男 93 人，女 101 人，合計 194 人となり，11 時で，男 66 人，女 69 人，合計 135 人となる。者米の市の場合は，11 時が市に参集する人数がピークに達し，その人数は毎回平均するとおよそ 1200 人である。頂青の市は市に集まる人数からみた場合に，そのピークが 10 時ごろと早い。また頂青のピーク時の人数は，者米のピーク時の人数と比較するとおよそ 6 分の 1 と少ない。

5　平河の市

a　町の位置と市における露店の分布

平河の市は，者米で市がたつ日を第1日目とすると，第3日目に開催される市である。平河は，者米から西に直線距離でおよそ17kmの位置にあり緑春県に属する。市は東西に走る街道沿いのおよそ200mの区間と，街道の北側に設置された南北およそ100mで，東西およそ200mの広場で開催される（図6[19]）（写真10）。ここでは市がたつ広場を，仮に「北市広場」と呼び，北市広場への入口を中心にして，東側のおよそ100mの区間の通を「東市通」，西側のおよそ100mの区間の通を「西市通」と呼ぶことにする。

東市通の北側では，青果を扱う露店がぎっしりと並ぶ（No.45～93）（写真11）。一方，東市通の南側では，青果だけでなく，アイスクリーム（No.7），焼豆腐（No.12），酒（No.30，33），歯医者（No.9）などに混じって，アヒル，ニワトリのヒナを売る露店が出店している（No.18～29）。また子ブタを販売する露店は，市が開催されている広場の裏側（No.229）で店をだしていた。

西市通の北側では，ハニ族が経営する豆腐・タマゴ・モヤシを売る露店が並ぶ（No.100～116）。道を挟んで南側には常設店の雑貨店が並ぶが，各店先で台を作り商品を広げて臨時の「露店」を開いていた（No.38～44）。西市通と東市通りのほぼ中央に，北市広場への入口がある。入口を入ったすぐ左手に，スレート葺きで吹き抜けの建物が5棟，東西に並んでいる。ここにはタバコ（No.169～171）の他に，衣料品を販売する店と食堂が営業していた。食堂は常設ではなく市の日だけ開催される臨時のもので，場所だけを貸し出している（写真12）。料理に使用するコンロ，料理道具，食器，イス，テーブルなどは経営者が自前で持ち込んでくる。

北市広場の東側では雑貨店が集中するが，その間で靴（No.134，148，150），鉄製品（No.154），衣料品（No.117，132，149，155，156），文具（No.131），時計修理（No.157）などの生活用品を販売する露店や，麺屋（No.136），駄菓子（No.121，124）などの食品を扱う露店が混じる。また北広場の北側には，タバコ（No.194～210）や衣料（No.216～212）を販売する店が集中して出店している。北広場の西端には，ブタ肉だけを扱うコーナーがある（No.221～228）。広場の北側には食堂や雑貨，それにビリヤード場，衣料品を扱う常設店が並んでいる。

平河の市と他の市との相違は，市がたつときにだけ使われる専用の「北市広場」が設置されている点である。この広場は1990年代の終わりに政府によって作られたものである。従来は街道沿いに露店が出店していた。しかし露店数が増加し車の通行に支障をきたしたため，広場の設置を余儀なくされたという。

平河の市は，他の市が道路沿いにたつという形態とは異なる。しかし露店の分布は，街道沿いの東市道路＝青果・家畜など，西市道路＝食料品・雑貨，北市広場の西＝食堂・衣料，北市広場の西端＝ブタ肉というふうに，商品のカテゴリーによって露店がグループを作りながら分布している点は他の市と共通する。

b　露店の種類

2004年10月20日の市日にたった露店は229店であり，常設店は22店だった。このうち常設店

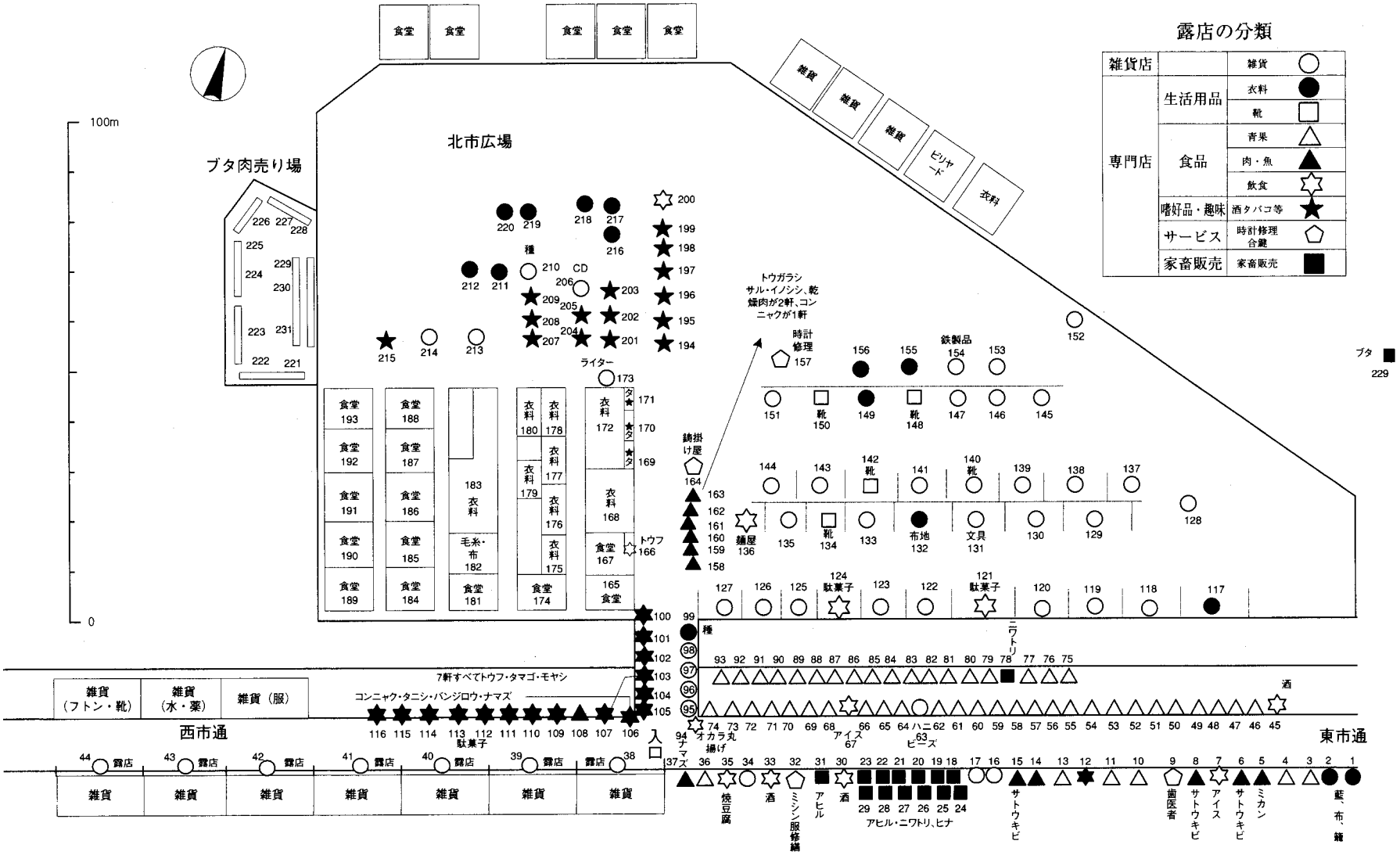

露店の分類
雑貨店
専門店
生活用品
食品
嗜好品・趣味
サービス
家畜販売
雑貨
衣料
靴
青果
肉・魚
飲食
酒タバコ等
時計修理
合鍵
家畜販売
北市広場
ブタ肉売り場
100m
0
食堂
雑貨
ビリヤード
衣料
種
CD
ライター
トウガラシ
サル・イノシシ、乾燥肉が2軒、コンニャクが1軒
時計修理
鉄製品
鋳掛け屋
麺屋
布地
文具
駄菓子
トウフ
ニワトリ
酒
ブタ
7軒すべてトウフ・タマゴ・モヤシ
コンニャク・タニシ・バンジロウ・ナマズ
雑貨（フトン・靴）
雑貨（水・薬）
雑貨（服）
西市通
東市通
入口
露店
オカラ丸揚げ
アイス
ビーズ
ハニ
ナマズ
焼豆腐
ミシン服修繕
アヒル
アヒル・ニワトリ、ヒナ
サトウキビ
歯医者
ミカン
藍、布、籠

図6　平河の市

の内訳は，食堂（5店），雑貨店（14店），靴（1店），薬（1店），遊技場（1店）である。露店では特定のカテゴリーの商品の販売やサービスをおこなう専門店は182店（79.5％）を占め，雑貨店は47店（20.5％）となる。専門店は食品関係の露店が最も多く，112店と全体の48.9％を占める。以下，生活用品（28店，12.2％），嗜好品・趣味（23店，10.0％），サービス（4店，1.7％），家畜販売（15店，6.6％）という比率であった。食品は青果（64店，27.9％），肉屋（8店，3.5％），飲食（27店，11.8％），食材（9店，3.9％），魚屋（1店，0.4％），駄菓子（3店，1.3％）の順であった。他の市と同様に，青果を販売する露店が全体の30％近くを占める。

生活用品を専門に販売している露店の内訳は，衣料（22店，9.6％），靴（3店，1.3％），金物，ライター，文房具（それぞれ1店，0.4％）となる。その他の嗜好品・趣味に関わる商品を販売している露店の内訳は，タバコ（19店，8.3％），酒（3店，1.3％），CD（1店，0.4％）となる。サービスに分類した露店には，時計修理，歯医者，鋳掛け屋，服の修理がそれぞれ1店出店していた。家畜販売は，ブタ（1店），アヒル，ニワトリのヒナ販売（14店，6.6％）となる。

c　青果

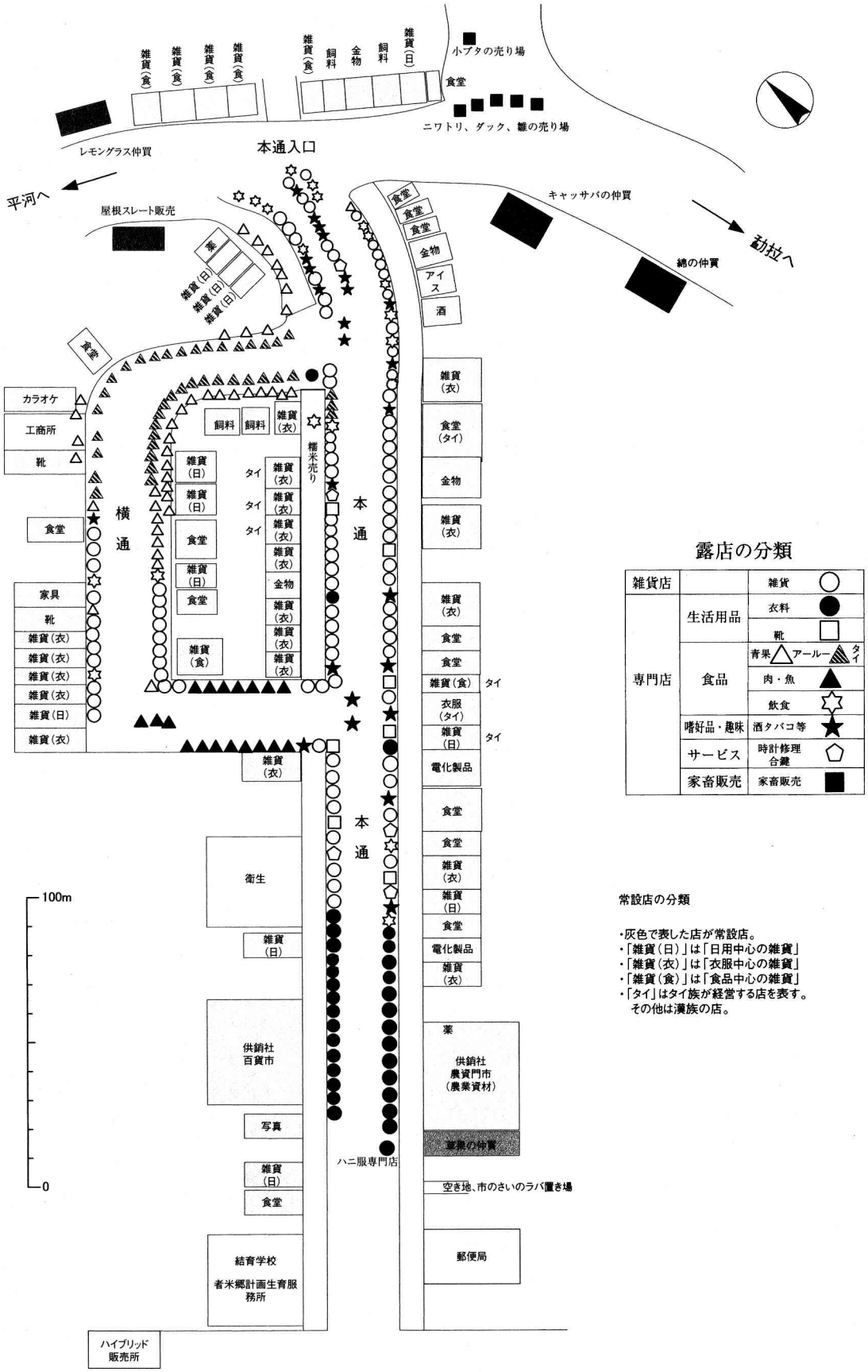
者米の市では，野菜と果実を販売する露店が分離している。しかし平河の市では，野菜と果実が同じ露店で販売されているため，青果として分類した。青果を販売している露店は64店で民族ごとの内訳は，ハニ族が53店（82.8％），漢族が10店（15.6％）不明が1店とハニ族が最も多い。ハニ族が販売する野菜のうち，多いものから列挙すると，トウガラシ（16店），青菜（11店），モヤシ（7店），ショウガ・ドクダミの根（5店），ネギ・ニラ・ソバの葉（4店）となる。一方，漢族が販売する野菜は，ハクサイ（7店），ジャガイモ（6店），トマト・ナス・ピーマン・（各3店），キュウリ（2店），カリフラワー・ニガウリ（各1店）となる。ハニ族と漢族とでは扱う野菜の種類が異なっており，しかも漢族が扱う野菜はいずれも金平県や緑春県以外で生産し持ち込まれたものである。

6　者米の市

a　者米と露店の分布

者米谷の季節は，雨季（5月～10月）と乾季（11月～翌年の4月）にわかれる。前回の者米の市は，乾季にあたる時期を中心に調査した［西谷2005b］。ここでは2004年5月から6月の雨季にたった市について述べる。者米は，北西から南東に走る街道沿いと，者米川に南から流れ込む納幇川との合流点にできた町である。町は道路の北と南に広がっているが，市は街道とほぼ直角に交わり，南へと延びる道路を中心にして開催される。この南北の通りを「本通」と呼んだ（図7）。本通は南におよそ350 m延びるが，その南端に公所（郷政府の建物）がある。本通を30 mくらい入ったところで，西に折れる道がある。この道は逆コの字形で，100 mくらい南に延びたところで本通にでる。ここもまた市が開かれる通りであり，「横通」と呼ぶことにする。

2004年6月6日（以後，雨季の市）の市では，本通を入ったおよそ200 mの区間には，雑貨店，靴，タバコ，酒，マントウ・糯米などを扱う飲食店や時計を修理する店が軒を連ねた。これを過ぎたおよそ100 mの区間に，衣料品を売る露店が並ぶ。横道は野菜・果実，ブタ肉，川魚を販売す



露店の分類

雑貨店		雑貨 ○
専門店	生活用品	衣料 ●
		靴 □
	食品	青果 △ アールー タイ
		肉・魚 ▲
		飲食 ☆
	嗜好品・趣味	酒タバコ等 ★
	サービス	時計修理 合鍵 ⬠
	家畜販売	家畜販売 ■

常設店の分類

・灰色で表した店が常設店。
・「雑貨(日)」は「日用中心の雑貨」
・「雑貨(衣)」は「衣服中心の雑貨」
・「雑貨(食)」は「食品中心の雑貨」
・「タイ」はタイ族が経営する店を表す。
その他は漢族の店。

図7　者米の市

る露店が中心である。以上述べた市の露店の分布は，2003年11月15日（以後，乾季の市）にたった市と同じである。雨季の市で変化したのは，衣料の露店が並ぶ背後にクーツォン族が野菜と籠を販売する露店を出店したことである。このように，者米の市も，入口付近＝家畜販売→横通＝青果・肉・魚→本通（200 m区間）＝雑貨→本通（100 m区間）＝衣料と，商品のカテゴリーによって露店がグループを作りながら分布している。

b　露店の種類

者米の雨季における常設店は80店で，露店の出店数は293店を数えた。一方乾季の市では常設店の数は雨季の場合と同じであり，露店も306店で，差は13軒とそれほど大きな開きはない。乾季の市でたった露店は，特定のカテゴリーの商品の売買やサービスをおこなう専門店が227店（77％），雑貨店が66店（22.5％）を数えた。一方雨季の市では，専門店が243店（79％），雑貨店が63店（21％）であり，両時季の市に大きな差はない。

乾季の市では，5つのカテゴリーに分類した専門店のうち食品関係の露店が最も多く128店と全体の47％を占める。以下生活用品関係（53店，18％），嗜好品・趣味（27店，9％），サービス（5店，2％），医療品（2店，1％）という比率であった。雨季の市も，やはり食品関係の露店が最も多く143店と全体の46.7％を占める。以下生活用品関係（47店，15.4％），嗜好品・趣味（21店，6.9％），サービス（5店，1.6％），医療品（1店，0.3％）という比率であった。

食品を扱う露店は，乾季の市では野菜（63店，21.5％），果物（27店，8.2％），肉屋（15店，5.1％），飲食店（14店，6.8％），食材（9店，3.1％）魚屋（3店，1.0％）の順であった。一方，雨季の市では，野菜（81店，26.5％），果物（19店，6.2％），肉屋（13店，4.2％），飲食店（20店，6.5％），食材（7店，2.3％）魚屋（3店，1.0％）の順であった。乾季の市で生活用品を扱う露店の内訳は，衣料（31店，10.6％），靴（7店，2.4％），ライター（4店），金物（2店），布（1店），文房具（1店），洗面用具（3店），台所（3店），玩具（1店），ビニールテーブルクロス（1店），寝具（1店）という順になる。以下，家畜販売，タバコ（17店），酒（6店），音楽テープ・CD・VCD（4店）などの嗜好品・趣味に関わる商品を売る店となり，合鍵（1店），時計修理（4店）のサービス，医療品を扱う店がこれに続く。雨季の市では，衣料（18店，5.9％），靴（13店，4.2％），ライター（6店，2.0％），金物（3店，1.0％），文房具（1店，0.3％），台所（4店，1.3％），寝具（2店，0.7％）という順になる。以下，家畜販売（26店，8.5％），タバコ（11店，3.6％），酒（5店，1.6％），音楽テープ・CD・VCD（5店，1.6％）などの嗜好品・趣味に関わる店となり，合鍵（1店，0.3％），時計修理（4店，1.3％），歯医者（1店，1.3％）のサービス，医療品を扱う店がこれに続く。

者米における雨季と乾季の露店を比較すると，雨季にたった市では，露店の専門店が77％に対して雑貨店が23％，乾季にたった市では，専門店が79％，雑貨店が21％と商品のカテゴリーにおける比率に差はない。内訳も，両時季ともに食品を扱う露店数が最も多い。以下比率が高い順にみていくと生活用品，嗜好品・趣味，サービス，医療品となり両時季とも同じである。また食品を扱う露店は両時季ともに野菜を扱う露店の比率が最も高く，以下，果物，肉屋，飲食店，食材，魚屋の順であった。生活用品を扱う露天の順序についても両時季に差異はない。

ただ乾季にたった市では，衣料店の数が18店（5.9％）であったが，雨季にたった市では31店（10.6％）でありほぼ半減している。またテーブルクロス，おもちゃ，布を専門に売っている店が，乾季の市ではなくなっていた。これが季節による変化なのか，それとも既製服そのものが，者米谷ではさほど人気がないのか，継続した動向調査が必要であろう。雨季の市で新しく登場した露店に，歯医者[20]とクーツォン族による籠・野菜販売がある。また雨季の市と全く変化していない職種として，時計修理，合鍵の露店があげられる。この2つの職種は，ある程度の技術が必要であり，それだけに変化しにくいという側面があると考えられる。

c 青果

乾季の市において果実を販売する露店の民族ごとの内訳は，タイ族が17店，漢族が1店であり，タイ族の店が全体の94％を占めほぼ独占している。一方，野菜を扱う露店は，アールー族が42店（71％），タイ族が24店（24％），ヤオ族が2店（3％），漢族が1店（2％）とアールー族の店が全体の半数近くを占めることに特徴があった。雨季の市では，果実を販売していたのはタイ族だけで19店を数えた。野菜を扱う露天は，アールー族が44店（54％），タイ族が28店（35％），クーツォン族が9店（11％）であった。両時季におけるアールー族とタイ族の露店数にそれほどの変化はないが，乾季には露店をだしていなかったクーツォン族が，雨季の市に野菜を売っていたのが特徴だといえよう（写真13）。

乾季の市で販売されていた青果は，食品類のなかで56種と商品の種類が最も多い群である。雨季の市では，38種類と乾季の市と比較すると種類がはるかに少なかった。果実は，乾季の市ではミカン，リンゴ，パイナップル，バナナの4種類が販売されていた。雨季の市では，スモモ，ライチ，マンゴウ，バナナと季節によって種類が全く異なることがわかる。またスモモとライチは，者米谷では栽培されていない。金平県外から輸入された商品である。金平県に入ってきた外来の果実は，いったん金平や勐拉の果物問屋に卸される。果実を販売する露店の主はほとんどが者米に在住しているが，仕入れのために勐拉や金平などの果実問屋に出向いて購入してくる。ライチには2種類あり，やはり金平外から入ってくるものとの者米谷で生産されるものがある。者米谷では，ヤオ族（向陽村，新村）やハニ族（竜塘）がライチを生産している。

乾季の市で野菜を扱う露店は63店を数えるが，そのなかで最も多くの店で売っている野菜は青菜（32店）である[21]。以下販売店数の上位3番目までを列挙すると，トウガラシ（21店），洋絲瓜（13店），ハクサイ・ピーマン・ショウガ（9店）の順になる。一方雨季の市において，最も多くの露店で売られている野菜はニラ（31店）である。以下，トウガラシ（24店），インゲンマメ（21店），ネギ（15店），ナス（11店），ジャガイモ（11店），キュウリ（10店）の順になる。11月15日の市と比較すると，野菜の種類が変わっていることがわかる[22]。

乾季の市で野菜を主として商っていたのは，アールー族（42店，71％）とタイ族（14店，24％）だった。両者が販売する野菜を比較すると，アールー族が販売する野菜はすべて村の周囲の菜園畑で栽培されたものである（写真14）。一方タイ族が販売する野菜のうちトウガラシとピーマンを除く野菜は，果実と同様に勐拉や金平で仕入れて，それを者米の市で販売している。このうちアールー族は，セロリ，ジャガイモ，窩笋[23]，ササゲ，トマト，キャベツ，カリフラワーを栽培して

いない。これらは，タイ族が主として販売する野菜であった。雨季の市において，アールー族が販売する野菜を多い順からみると，ニラ（30店），インゲンマメ（15店），ネギ（15店），トウガラシ（12店），ナス（10店）となる。ネギ以外の野菜は，販売している露店は少数ではあるが，タイ族も扱っている種類である。しかしネギ，バナナ，カボチャ，洋絲瓜，タケノコ，未同定もの一種類，パパイヤの花の7種類の野菜は，タイ族の露店でしか扱っていない。

タイ族が扱う野菜を多い順にみると，トウガラシ（12店），ジャガイモ（11店），インゲンマメ（5店），キュウリ（5店），キャベツ（5店），サンショウ（5店），トマト（4店），ハクサイ（4店）となる。このなかでジャガイモ，トマト，ハクサイと，販売店数は少ないが，ニンジン（2店），リョクトウ（2店），トウモロコシ（2店），コンニャク（2店）が，タイ族の露店だけで売られている野菜である。雨季の市ではアールー族とタイ族に加わってクーツォン族も野菜を販売していたが，販売していた野菜の種類はラッキョ，インゲンマメ，キュウリ，青菜，枝豆，ニラと少ない。このなかでラッキョは，他の民族が売っていない種類の野菜である（写真13）。

乾季と雨季の野菜販売の相違についてまとめると，まず乾季の市では野菜を売っていなかったクーツォン族が，雨季の市では露店をだしていたことが特徴としてあげられる。次に雨季の市は，乾季の市と比較すると販売されていた野菜の種類が少ないことが指摘できる。また野菜の種類も雨季と乾季とでは大きく異なり季節性が反映しているが，タイ族が扱う野菜は勐拉や金平から買い付けてきた野菜であるのに対して，アールー族やハニ族が扱う野菜は，いずれも自家栽培の野菜を市に持ち込んで販売している。いずれにしても乾季と雨季の野菜販売に共通しているのは，民族ごとに扱う野菜に特色があり，それぞれに販売戦略をもっていることだといえる。

d　市における分業による製品化

者米の市では野菜だけでなく，藍色に染めた木綿布やカゴなども売られている。これらの品物はいわゆる工業製品ではなく者米周辺の村民が作ったもので，しかもその製造過程には複数の民族が関わっている。例えば木綿布の材料である綿は，タイ・ハニ族が栽培したものか，もしくは行商人がヴェトナムから輸入したものが市で販売されている。それをタイ族の女性が買い取って，糸に紡ぎ織機で無地の綿布に織りあげる。織り上げた無地の布は市で販売され（写真15），その一部はハニ族が買い取り，藍で染めあげた布に仕上げる。ハニ族は藍色に染めた木綿布を，アールー・ヤオ・クーツォン族などに売る（写真16）。

またハニ族は雨季の市で竹製の背負い籠を売っていた。しかしこのカゴには肩紐を一緒に売っていない（写真17）。カゴは，紐を2本つけて背負うか，または1本の紐つけそれを額にあてて背負う。もしくは，紐を肩からたすき掛けにして背負うかの3つの方法がある。一般的には，男性は紐を2本つけて両肩に背負う場合が多い。ヤオ族の女性もやはり紐を2本つけて背負う。アールー族やハニ族の女性は，荷物が多い場合には紐を1本だけつけ額にあてて背負う。またハニ族やタイ族の女性は，荷物が少ない場合，紐を肩からたすき掛けにして背負う。

このように背負い籠は，民族が荷物の程度によって背負う方法が異なるため，紐の形に好みがあり，長さを調整する必要がある。紐は布や市で売っているビニール製のロープを利用して自分たちで作る。しかしもっともよく使われるのはクーツォン族が作った丈夫な籐の肩紐である。クーツォ

ン族は，何種類かの長さに作り分けた籐の肩紐を市のなかを歩きながら販売している（写真 18）。クーツォン族は，籐を使った工芸品の技術に長けているからである。

市における余剰生産物の処理は，特定の民族や集団によって独占されているのではなく，市を管理する郷政府に場所の代金を支払えば自由に参加することができる。自由度が高く開放された市の特質は野菜などの販売に表れているだけでない。藍染めの布や籠の製造過程と販売にみられたように，各民族の得意とする技術を分担することで1つの品物を作り上げていくという，「自然発生的な分業体制」とでもいうべき姿を可能にしているといえるだろう。

❸……考察

1　市の日取りと立地

金平県内では，渡口から者米までの街道沿いとその周辺で 14 の市がたつ。渡口では日曜日ごとに市が開催されるが，その他の市は 6 日ごとに 1 回の市がたつ。その日取りは太陽暦によってではなく，十二支をもとにして決定されている（表 3）。

例えば金平では，子の日と丑の日に市がたつ。子を第 1 日目とすると，次は第 7 日目の丑の日に市がたつ。つまり 6 日ごとに市がたつことになる。金平県やそれに隣接する緑春県や元陽県でも，少なくとも清の末期には十二支を日取りの基準にした市が開催されていたことがわかっている［西谷 2005a］。

市のたつ第 1 日目を金平として街道でたつ市の関係をみていくと，金平→那発→勐拉→八道班→三家道→阿得博という順で市がたつ（図 8）。阿得博と勐拉とは直線距離にしておよそ 30 kmあり，この範囲の市は同じ日に市がたたないように日取りが決められている。これを金平グループとよんだ［西谷 2005a，b］。

者米の市を第 1 日目として，街道にたつ市の順序みていくと，者米→螞蟥塘→頂青→平河・勐拉→三棵樹となる。者米と勐拉とはおよそ直線距離にして 40 kmあり，この間でたつ頂青，三棵樹，螞蟥塘と平河・勐拉の市日は重ならない。これを者米グループとよんだ。勐拉の市は，金平の市グループにも属している。平河は金平県の西に位置する緑春県で開催されるのだが，この市の西南方向の街道にそって，阿普，新寨，半坡で市がたつ。ただし半坡と阿普では 6 日ごとではなく，12 日ごとに 1 回市がたつ。

表 3　市の日取り

		金平県内	緑春県内
1	子と丑	金平，頂青	
2	丑と未	那発	新寨
3	寅と申	勐拉	平河，半坡（寅の日のみ。12 日ごと）
4	卯と酉	八道班，三棵樹，銅場	
5	辰と戌	者米，三家道	阿普（辰の日のみ。12 日ごと）
6	巳と亥	阿得博，沙依坡，大寨，螞蟥塘	

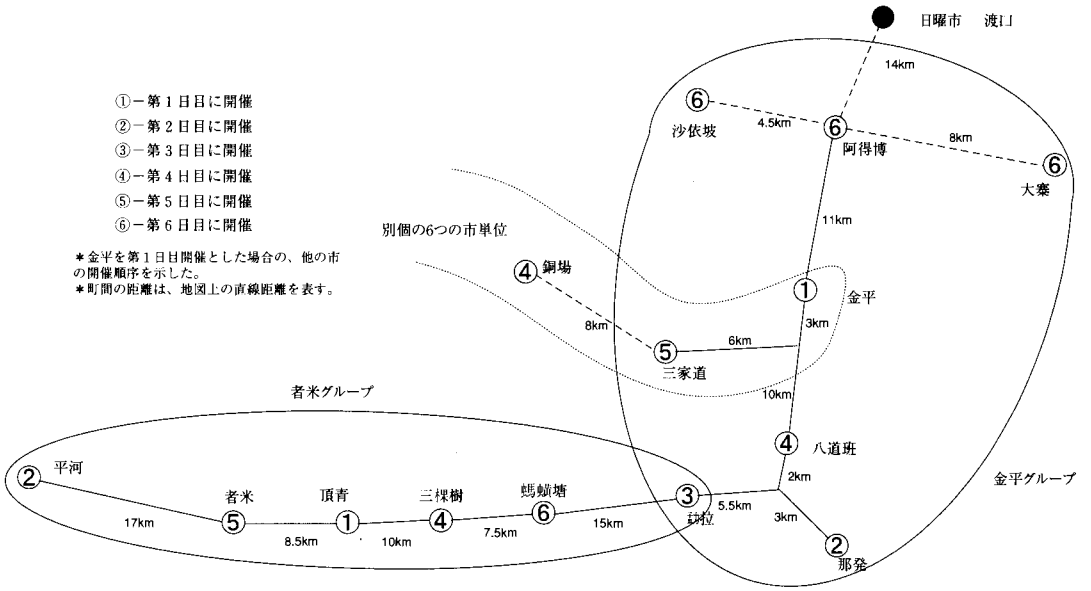


図8　6日ごと市グループの関係

市は街道沿いの町にたつが，村民の立場からからみた場合，市の立地にはどのような条件が必要なのだろうか。者米の市を例にとると，村民が市に通う交通手段には2つの方法がある。まず徒歩である（写真19）。者米の市に野菜を売りにくるアールー族は，者米の北側の山地に分布する村から片道3～4時間の山道を歩いて通ってくる。距離にするとおよそ半径8kmの範囲内にある村である。もう一つの方法は街道沿いを走る自動車の利用で，者米の場合，東西およそ20kmの範囲にある村の人びとが集まってくる。

また者米の南側の山地にはクーツォン族の村が散在するが，やはりおよそ半径8kmの範囲内にある村が者米の市を利用している。しかしかつてはヴェトナム側の村民も国境を越えて，者米の市に集まってきていたという。いずれにしても市は，東西南北に延びる山道と街道の結節点に位置していることと，市を利用する多く村民の交通手段が徒歩によっていることが指摘できる。

次に頂青の場合を例にあげると，町を南北に貫く道路は者米川に達するが道はそこで終点になるのではなく，つり橋によって北岸の老集寨郷内の道路と繋がっている。北東に直線距離にしておよそ5km進むと，ハニ族の村である老集寨郷大竹棚に達する。さらにここから北西におよそ3kmいくとアールー族の村が多い羅盤に至る。頂青より南の者米拉祜族郷内には，およそ半径8km以内にクーツォン族の村である六六新寨や老集寨，ヤオ族の村である梁子瑤塞がある。これらの村の人びとが，頂青の市を利用している。いずれも徒歩だと，3～4時間以内の距離である。このように市に徒歩で通える範囲は，直線距離にしておよそ8km，徒歩で3～4時間の範囲にある。これは他の螞蟥塘，三棵樹の市に集まってくる村の範囲と徒歩による時間にも共通していえる特徴である。

次に市がたつ各町の距離をみると，平河―者米の間が17km，者米―頂青の間が8.5km，頂青―

三棵樹の間が10 km，三棵樹―螞蟥塘の間が7.5 km，螞蟥塘―勐拉の間が15 kmである。市がたつ町と町の間は，平均すると10.5 kmになる。者米，頂青，三棵樹を中心にして，村民が市に通う最大距離である8 kmの半径を描くと，者米谷に分布する村は，ほぼこの3つの円内に収まる。つまり街道沿いにたつ6日ごとの市は，基本的には周囲の村民が徒歩で通うことを前提としており，そのためには河谷平地沿い町で一定の距離をおいてたつ必要がある。

2 露店の分布

市における露店の分布は，その特徴から3つのタイプに分類することができる。第1は，者米・螞蟥塘タイプである。者米における露店の分布は，街道の入口付近からみて，家畜販売→横通＝青果，肉，魚→本通（200 m区間）＝雑貨→本通（100 m区間）＝衣料を扱う露店がグループを作って並ぶ。螞蟥塘もやはり，街道の入口付近から露店は，青果・野菜→脇道＝肉，魚→雑貨，食品→衣料のグループを作りながら順に並ぶ。このタイプは，街道の入口付近に青果，肉，魚などの食料品を販売する露店が集中することを特徴とする。

第2は，頂青・平河タイプである。頂青は，街道入口から肉，魚→雑貨→青果の順に露店がグループを作りながら並ぶ。平河の市は，街道沿いの東市道路＝青果・家畜など，西市道路＝食料品・雑貨の露店，北市広場では西＝食堂・衣料，北市広場の西端＝ブタ肉というふうに露店が分布している。このタイプは市の入口付近に，青果または肉・魚を販売する露店が集中するが，この両者が分離しているタイプである。

第3は，三棵樹タイプである。街道からの市に入る付近から順番に，雑貨，衣料など→青果→肉，魚という順番であり，青果，肉などの食料品の露店が，街道から市に入る入口付近ではなく，市の最も奥に集中するタイプである。

露店の分布によって3つのタイプが抽出できるが，特に青果や肉・魚の露店は，三棵樹の例を除くと，街道から市に入る最も人が集中しやすい入口付近に集中する傾向がうかがえる。しかしいずれの市も，商品のカテゴリーによって露店がグループを作りながら分布している点において共通している。

3 常設店と露店

常設店と露店の出店数やその種類と，市に参集する人数にはどのような関係があるのだろうか。露店数を比較すると，最も多く露店が出店するのは者米で293店を数える。以下，平河（228店），三棵樹（146店），螞蟥塘（94店），頂青（93店）と続く。各市を市に人びとが滞留するピーク時の人数から比較すると，者米ではおよそ1200人[24]で，三棵樹では587人，螞蟥塘386人　頂青では194人を数えた[25]。それぞれの市のピーク時の人数を露店数で割ると，1店あたりの人数が者米で4.1人，三棵樹で4.0人，螞蟥塘で4.1人，頂青で2.0人となる（図9）。頂青を除くと，ほぼ露店の1店に対して平均して4人という数値が得られ，ピーク時における人数と露店数が明らかに相関関係にあることがわかる。

では参集する人数が多い市と少ない市では，常設店や露店の種類にどのような違いがあるのだろうか。常設店は，者米（80店），頂青（10店），螞蟥塘（10店），三棵樹（7店）となるが，各市

で必ず存在する常設店は食堂である。次に者米では常設店が他の市のたつ町と比較すると多い。その種類は，換金作物として重要な草果，綿，キャッサバ，レモングラスなどを買い取る仲買の店が中心である。螞蟥塘にキャッサバを仲買する店が1店あるが，三棵樹，螞蟥塘，頂青の他の町には存在しない。このように者米は他の市と比較すると，換金作物を買い取る機能が強いことが特徴として指摘できる。

露店は特定のカテゴリーの商品の売買や，サービスをおこなう専門店と雑貨店の2つに分類した。専門店は便宜上，生活用品，食品，嗜好品・趣味，衣料品，サービスの5つに分類した。このなかで各市に共通して存在する露店の種類は，雑貨店，専門店の生活用品に分類した衣料と，食品に分類した青果，肉魚屋，食材（豆腐など），それに嗜好品・趣味に分類したタバコ，酒，音楽テープ・CD・VCDである。特に食品に関する露店がおよそ45～50％と全体の半数近くを占めており，食品の売買が重要な地位を占めていることが共通の特徴として指摘できる。

者米は常設店数，露店数，集客数のいずれをとりあげても最も数が多い。その特徴は先ほど他の市よりも換金作物の仲買機能が強いことを指摘したが，さらに露店の職種をみると生活用品では靴，洗面用具，台所，ライター，金物，布，文房具，おもちゃ，寝具といったように，露店が細かく専門化している。ところが市に集まる人数が者米より少ない三棵樹や螞蟥塘では，衣料，靴，ライター，金物といった生活用品については専門の露店がたつが，その他の種類の商品は雑貨店で販売されている。さらにピーク時の露店数1店あたりの人数が平均2人と他の市より少ない頂青では，衣料，靴，ライター，金物といった商品もすべて雑貨店で一括して販売され，商品の種類別に露店がたつことはない。

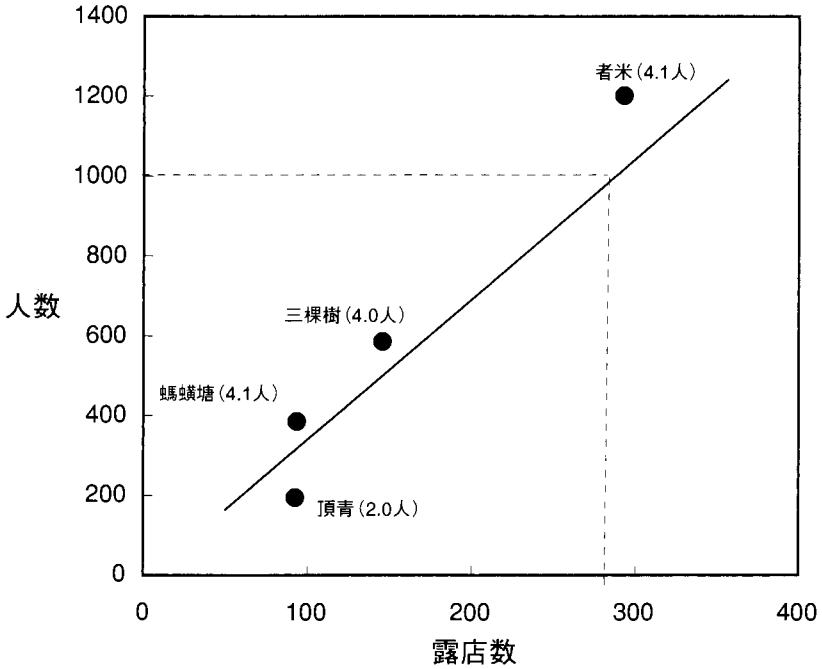


図9　人数と露店数の関係

ところで医療品，サービス，家畜販売のカテゴリーに分類される露店は，市の人数とは関係なく市によって出店の有無に差異がある（表2）。例えば合鍵を商売とする露店は者米の市でしか店をださない。者米の診療所には歯科があるのだが，歯医者を営む露店は三棵樹にしかたたない。また今回の調査の時期には，ブタ，アヒル，ニワトリなどの家畜販売の露店は，者米，頂青，平河ではたつが，三棵樹，螞蟥塘では出店していなかった。しかしこれらの職種は専門性が高く，今回の調査の時期には市で出店していなかったが不定期に市を回っており，必ずしも市の人数と相関関係にある店ではないといえる。

このようにそれぞれの市は，すべての種類の商品やサービスを万遍なく網羅しているのではないことがわかる。また市の常設店や露店の種類は，参集する人数によって差があることが指摘できる。特に者米でたつ市は規模の大きさだけでなく，さまざまな機能が最も充実しているといえる。またピーク時の人数と露店数には強い相関関係があるが，市ごとに集まる人数には限界があり，露店数がそれに対応していると考えられる。

4　露店の野菜販売からみた市

食品に関する露店が市のおよそ半数近くを占めていることを指摘したが，そのなかでも螞蟥塘を除く各市では，青果を扱う露店が全体のおよそ30％近くを占める。そこで野菜の販売から，市の特徴をさぐるため，各市で販売されている野菜の種類を5，6月の雨季と，10，11月の乾季の両時期をとりあげて比較してみたい。

雨季の季節にあたる6月6日に者米でたった市では，38種の野菜が露店で売られていた。最も多く販売されていた野菜はニラで，以下主要な野菜を列挙するとトウガラシ，インゲンマメ，ネギ，ナス，ジャガイモ，キュウリという順になる。三棵樹の市では，野菜の種類は20種で，最も多くの露店で売られていた野菜はキュウリである。以下上位を列挙すると，トウガラシ，インゲンマメ，青菜，カボチャ，ナス，ジャガイモ，ハクサイの順になる。頂青の市では，野菜の種類は27種で，最も多くの露店で売られていた野菜はニラである。以下上位を列挙すると，トウガラシ，高菜，ハクサイ，ジャガイモ，インゲンマメ，カボチャの葉の順になる。

乾季の平河で，最も多くの露店で販売されていた野菜はトウガラシである。以下，青菜，モヤシ，ショウガ・ドクダミ，ネギ・ニラ・ソバの葉の順になる。

乾季に螞蟥塘でたった市では，野菜の種類は27種で最も多くの露店で売られていたのはハクサイである。以下，トウガラシ・セリ・ジャガイモ，青菜，ササゲ・ピーマン・トマトの順になる。乾季に者米でたった市では，51種の野菜が販売された。上位から列挙すると，トウガラシ，洋絲瓜，ハクサイ・ピーマン・ショウガの順になる。このように同じ季節にたった市でも，各市によって売られている野菜の種類に相違があることがわかる。

次に野菜の販売者と購入者の関係について述べたい。者米谷は9つの民族が混在して住んでいるが，その分布は均一ではないことはすでに述べた。者米谷の西に位置する緑春県平河周辺はハニ族が多く，者米，頂青の南側の山地にはクーツォン族が，北側の山地にはアールー族とハニ族が多く住む。者米谷の東の端に位置する三棵樹から，勐拉までの周辺山地はミャオ族が居住する地域である。そして河谷平野にはタイ族，ジョワン族が居住している。

平河の市で野菜を扱う露店の民族をみていくと，ハニ族（82.8％），漢族（15.6％）とハニ族が中心である。者米の2003年11月15日の市における果実を販売する露店の民族ごとの内訳は，タイ族の店が94％とほぼ独占している。一方，野菜を扱う露店はアールー族（71％），タイ族（24％），ヤオ族（3％），漢族（2％）とアールー族の店が全体の7割を占める。者米で2004年6月6日にたった市では，果実を販売していたのはタイ族だけだった。野菜を扱う露店は，アールー族（54％），タイ族（35％），ハニ族（11％）であった。アールー族もタイ族も，11月15日の市と出店数にそれほどの変化はないが，6月6日の市では昨年は露店をだしていなかったクーツォン族が，出店していたのが特徴だといえよう。頂青の市では，ハニ族（43.3％），タイ族（13.3％），アールー族（6.7％），ヤオ族（6.3％）とやはりハニ族の露店が多いことが特徴である。三棵樹の市では，野菜の露店販売の民族ごとの内訳は，ミャオ族（82％），ハニ族（5.9％）と圧倒的にミャオ族が主体である。

このように市での野菜販売は，その市の周辺民族が主体になっていることがわかる。先に市は，周辺の村民が歩いて通える場所に立地する距離にあると述べた。市は村民が日常生活用品を購入するだけでなく，野菜などの余剰生産物を日常的に売って現金に換える機能をもっていることが指摘できる。

では野菜を売りに来た村民が市でどのような行動をとるかみてみよう。者米の市を例にして参集する人数の推移と，アールー族の市での行動パターンをとりあげたい。者米の市における滞留人数の推移の分析から，市に客が集まりはじめるのは8時ごろからで，14時までを1時間ごとに調べると11時の時点で，市の滞留人数がピークに達することがわかっている［西谷2005a，b］。それ以降減少に転じ，14時を過ぎると市はほぼ終了する。

アールー族は，6時半ごろから市に集まりはじめる[26]。アールー族の村は，老集寨郷の標高およそ1300 mの山地にあり，ここから3～4時間歩いて市に通ってくる。彼らの第一の目的は，自家栽培した野菜を市で売ることである。アールー族は，市に持ち込んだ野菜を8時から11時ごろまでにほぼ完売する。そして11時ごろを境にして，売り手から反対に買い手に替わる。そして日常生活に必要な洗剤，布，針，ブタ肉などの購入をはじめる。つまり午前中に野菜を売った儲けの一部が，生活物資の購入に回される。必要な商品を購入したアールー族の一部は，昼前ごろから帰路につきはじめ，午後1時をまわると市にアールー族の姿はなくなる。

頂青，三棵樹，螞蟥塘，平河の市においても，およそ3割の露店が青果を扱っており，いずれも周辺に居住する各民族が者米でみたのと同じような行動パターンにそって野菜や果実を売り，現金収入に換え生活物資を購入して午後には帰路につく。このように市は，周辺の各民族が余剰生産物を現金にかえる小商いの場になっている。これは市で買い物をする民族と，市で野菜を売る民族と比較するとより明確になる。例えば三棵樹では10～11時間帯が市に人が集まるピークになるが，その時市で買い物をしている民族ごとの割合は，ハニ族（44.6％），ヤオ族が（17.9％），ミャオ族（12.5％），不明（25.0％）となる。三棵樹の市では，野菜を売るのはミャオ族が中心であるが，それを購入するのはハニ族を筆頭とする他の民族という構図が浮かびあがってくる。

2003年11月15日に者米でたった市を売り手からみると，常設店は漢族がほぼ独占し，野菜の露店はアールー族が，果実はタイ族が中心であった。ところが市の客の各民族構成は，ハニ族

(55.3％) が半数以上を占め，以下，タイ族 (19.5％)，アールー族 (14.5％)，ヤオ族 (7.5％)，クーツォン族 (3.2％) の順に多い。このように各市によって，商品を売る側とそれを買う側の民族が明確に異なることが指摘できる。

このように市は周辺農民の生活物資の購入だけでなく，その資金を獲得するための小商いの場になっている。さらに市ごとに，販売されている野菜などの種類に差異があり，市ごとに商品の差別化が存在することがわかる。

❹……まとめ—市のたつ条件とその特質—

者米周辺の村民は，野菜などの余剰生産物を販売するとともに，それで得た現金を市での生活必需品の購入費用にあてていた [西谷 2005a]。このことから筆者は市を成立させる第1の条件として，「余剰生産物の現金化と生活必需品の購入」の重要性を指摘した [西谷 2005b]。本稿の分析結果からも市を成立させているこの第1の条件は，者米の市にだけに該当するのではなく，他の頂青，三棵樹，螞蟥塘，平河でたつ6日ごとの市について共通して当てはまる。さらに市で余剰生産物を売る村民は，市ごとに民族が異なっており，このことはそれぞれの市周辺の民族分布と深く関連していることがわかった。しかも市ごとに，露店で扱っている野菜の種類は民族ごとに顕著な差異が認められた。市は余剰生産物を現金化し，その収入で生活必需品を購入する場になっている点は共通するが，市ごとに商品の差別化が認められ，それが各市独自の個性と魅力を作りだしていると考えられる。

次に6日ごとの市は街道沿いにある一定の距離をおいてたつが，者米の市の調査からその要因は，者米谷の河谷と山地からなる複雑な地形による交通の不便さにあると考えられた。このことから市がたつ第2の条件として，「徒歩移動における限界性」を指摘した [西谷 2005a]。この条件も者米以外の市について同様に当てはまる。村民が一日のうちに市に往復可能な最大距離は片道およそ8㎞で，時間にして3～4時間である。者米谷の街道沿いに市がたつ者米，頂青，三棵樹を中心に半径8㎞の円を描くと，者米谷の村はほぼこの3つの円内に収まることがわかる。村民にとって街道沿いにたつ6日ごとの市は，歩いて通える場所にたつ方が利便性が高い。そのためには市は河谷平地の街道沿いに一定の距離をおいて商人が動きうる範囲の中で開催される必要がある。

複数の市がたつことは，露店を専門にしている商人の側にとっても理由があることは，先の論考で指摘した。者米の2004年11月15日開催の市を例にとると，総商品数321種のうち，アールー族やタイ族が販売していた自家栽培の43種の野菜とブタ肉及び魚が，者米谷内で生産され消費されている。その他の87％にあたる278種の商品は，者米谷の外部から「輸入」されたものであり，工業製品や都市の食品会社の製品である。これらは漢族を中心とした露天商によって扱われている。市は山地に居住する村民が一日で行き帰りできる距離内にたつ。それにあわせて行商人が移動する。山地に村のある住民にとって，山をおりたところに市がたつことは，生産物を処理するにも者米谷では生産しない外来の工業製品を購入するにも便利である。反対に行商の露店にとっては，市を回ることで者米谷全体の村民の需要に対応できる。いわば農産物を山から谷へ運ぶ上下移動と，工業製品を谷沿いに運ぶ行商人の水平移動の結節点に市が存在するといえる。

こうして物資移動の結節点である6日ごとの市は，街道沿いに市日が重ならないようにたつことで，商人にとっても村民によっても複数の市の利用が可能になる。また市で売られている青果や生活雑貨は，露店を商う商人が昆明などの大都市に直接でかけて仕入れるのではない。市ネットワークの乗って運ばれてきた商品は，勐拉や金平など比較的大きな町に集積され，そこに露店の商人は商品を買い付けにいく。これが市が成立する第3の条件である「市ネットワークの存在と商人の介在」である。今回の調査でも平河から西の緑春県内に市がたつことが確認され，市ネットワークが途切れることなく数珠状に延びていることが確認された。

市がたつ第4の条件として「商品作物の処理機能」をあげた。例えば螞蟥塘でたつ市は他の市と比較すると，青果を販売する店舗が少ないことが特徴である。そのかわりに市ではキャッサバを仲買する店舗がある。螞蟥塘周辺のミャオ族はほとんどの家でキャッサバを栽培しており，市がたつ日の朝にまずキャッサバをまとめて売ることでかなりの現金収入を得て，それが市での生活物資の購入にあてられている。キャッサバは者米谷で消費されるのではなく，仲買人によって金平県外に輸送され，デンプンなどの材料にされる。しかし者米はキャッサバだけでなく，現在者米谷で重要な換金作物である，草果，レモングラスなどの農作物をまとめて買い取る仲買業者の店舗がある。そのため者米では，自家栽培の野菜の露店といった小商いだけでなく，まとまった量の換金作物を仲買業者に売り，現金を手にいれることが可能である。キャッサバ，草果，レモングラスなどの換金作物を仲買する機能は者米が最も高く，このことが，者米谷では者米に村民が最も多く集まる要因になっている。このように市は，村民が自ら歩いて定期的に生産物を処理する機能をもっており，そのためにも市が適切な位置に配置される必要がある。

さて各市によって村民が販売する野菜等の余剰生産物の種類が異なるだけでなく，合鍵，歯医者，ブタ，アヒル，ニワトリなどの家畜販売，サービスに属する露店の有無にもそれぞれの市によって差異が認められた。各市は商品やサービスを，同じように万遍なく網羅しているのではない。市によって，提供する商品やサービスにも差別化がみられる。村民にとって日常的に通う市がいくつかある理由は，市を目的に応じて選択しているためだと考えられる。また街道沿いに隣接する市は，市日が重ならないようにたつため，村民が複数の市に通うことが可能である。そして5つの市は露店の種類や参集する人数によって差があり，特に者米が5つの市のなかでは，規模が大きいだけでなく，仲買の店舗が多く買い取り機能も充実しており，専門化された露店が多くそれだけ商品の種類が豊富で，そのことが選択支の多様性を生み出し村人の吸引力を高めているといえる。

者米の市のもつ多様な機能のなかで，異なる季節の市を調査することでわかってきた，新たに注目すべき点について述べたい。その1つは露店の分布と市の関係についてである。今回おこなった5つの市の調査から，市内の露店の分布に3つのタイプが抽出できた。青果や肉，魚の露店は，三棵樹の例を除くと街道から市に入る最も人が集中しやすい入口付近に集中する傾向がうかがえる。しかしいずれの市も，商品のカテゴリーによって露店がグループを作りながら分布している点において共通している。ではなぜ同じ職種や商品を販売する店が集まるのだろうか。

中国においては解放前の市の研究から，市内での商店や露店が同じ職種がグループを作りながら分布している状況が報告されている［天野元之助 1953］。市において同じ職種の店が集まるのは，時代や地域を越えて共通する傾向があり，それは現代においても認められる。例えば那覇市第一牧

志公設市場調査報告［沖縄大学沖縄学生文化協会 1982］では，市において同じ職種の店が集まる理由として，「専門店街や食堂街の例をあげるまでもなく，同じような店が1カ所に集中しているからこそ市場に多くの客が集まるということは間違いない」と述べている。また「種類も品質も大差がないのだから，どの店で買っても同じということになる。これは人間関係によって固定客を分けあうという市の伝統的商法と不可分に結びついているに違いない」とも主張している。

者米の市においても常設店の食堂は，市日のための肉をまとめて購入するため，それぞれの店が特定の露店と取引する場合が多い。また野菜を売るアールー族の露店では，顔見知りの客が毎回同じ村人の野菜を買う姿が観察できる。しかし固定客を分けあうという理由だけだと者米の市程度の規模なら，さまざまな店が混在していたとしてもそれほど不便さを感じるとは考えられない。

者米の市では，カテゴリーごとの商品を販売する各露店の商品構成は一見するとさほど違いがあるようにはみえない。2003年11月15日に者米の市で売られていた商品は321種あった。ところが1つの露店でしか販売されていない商品は全種類の37.3％を占め，2店でしか販売されていない商品が18.3％，3店だけで販売される商品が9.3％，4店でしか販売されない商品が5.3％の順になる［西谷 2005b］。このように1店または2店でしか販売されていない商品が，321種の商品のうち実に半数以上を占めている。このことは各露店の商品構成は，同じにみえるのだが実際は各店によって微妙に異なっており，商品の品揃えに変化をもたせ差異化をはかっていることを示している。さらに1つ露店で販売されている商品の種類をみると，6～15種類と少ない［西谷 2005b］。しかし雑貨・衣料店の区画や，野菜を販売している通りは小商いの露店が集合することで，多くの種類の商品を買い物客に提供できることが可能になる。買う方からみれば，日常雑貨や食料品といった同じカテゴリーでくくれる商品が，市のあちこちに分散しているよりも，1カ所で選択できた方が便利であるだけでなく，多様な商品群からの選択が可能になる。このように市において同じカテゴリーを売る露店が集中するのは，各露店が小さく販売できる商品の種類も少ないという欠点を，多くの店が集まることで補っていることに主要な理由があると考えられる。者米谷の市の特質に「小商いの集合による商品数の創出と多様な選択性」を付け加えたい。

次に「市の自由度」につい述べる。研究史に述べたように，戦前から日本人研究者によっておこなわれてきた市の研究において，伝統中国の市の特徴の1つは，地域の住民が市を利用して物資を売買することに対して極めて開放的であることが指摘された。乾季の市において青果を扱う民族は，アールー族とタイ族が中心であったが，雨季の市ではこれにクーツォン族も加わって露店をだし野菜を売っていた。者米谷の市の特徴は，商品の販売が特定の集団や民族によって独占されているのではなく，誰もが自由に参加できる点にあるといえる。

市のもつ自由度・開放性が生み出しているもう1つの側面を指摘したい。それは藍染めや背負い籠の販売にみられる，市における民族ごとの分業ともいうべき姿である。綿から糸が紡がれ布になり，それが藍染めの布に仕上がっていく過程には，ハニ族，ヤオ族，タイ族が関わっていた。藍染め布の完成には，複数の民族がそれぞれの得意な技術を担当することで分業がおこなわれているが，その過程はある特定の商人などが介入して製造の流れを掌握しているのではない。市という場が分業を可能にしているのであり，その背景には誰もが自由に市に参加できるという条件が前提になっている。このように市は余剰生産物を誰もが自由に販売できる性格と，市内における品物の自

然発生的な分業体制というシステムを創出する機能をもっている。者米谷の市の特徴として「生産物の処理の自由度と技術の分担による製品の分業創出」を付け加えたい。

また市における自然発生的な分業は，各民族が得意な技術を所与のものとして有していたのではなく，市という場で交易がおこなわれ，相互に得意分野を認識する過程で開発され強化されていった可能性が高い。いわば「相互規制性による分業創出機能」といえるが，このことは彼ら自身の民族としての独自性を認識させる効果を生じさせ，民族のアイデンティティそのものも創出しているのではないかと推定している。

最後に市が成立する上で必要ないくつかの要因についてふれておきたい。1950年代の市の様子を記憶している老人に聞くと，市では貨幣が使われることはあるが，コメが主要な取引の基準になっていたという[27]。市では鉄製品や塩などが，外から入ってくる商品として重要であったが，市で交易されるのは食料品に関する商品が最も多かった。そして市での楽しみの1つは，さまざまなブタ肉の部位が入った煮込み料理を食べることだったという（写真20，写真21）。現在のような雑貨や衣料を扱う露店が多くたちはじめたのは，1990年代に入って漢族の商人が者米に移住してきた以降のことであり，それまではほとんどこうした露店は存在しなかった。つまり1950年代以前の市の形態は，者米谷ではどうしても生産できない鉄製品や塩など以外は，ブタ肉の販売と村民がもちよる野菜や狩猟採集による食料品が多く，こうした露店が市の中心を占めていた。ところが1990年代入ってから，雑貨や衣料の露店が市のなかでも数を増やしていき，市内での露店の分布においても食料品を販売する露店の周囲に付け足す形で規模が拡大していったのではないかと考えられる。各市の常設店を概観すると，露店のなかで最も最初に常設店化するのが食堂であることも，市の成立を考える上で食料品の販売と食べる楽しみが重要な要素になっていることを示している。市の成立を考える上で「交易品としての食料と食の楽しみ」を重要な要素として指摘しておきたい。

では定期市が成立するには，どのくらいの人数が市に集まる必要があるのだろうか。金平県では清代の末期に6日ごとの市がすでに存在していたが，市の様子が具体的にわかる資料として，1934年に編纂された『雲南金河行政委員区域地志資料冊』がある［雲南省金平苗族瑤族拉祜族自治県志編纂委員会1994］。それによると「金河は瘴癘の地とよばれ，面積が広く人口は少ない。住民の村落は山地にあり，人家の3～5戸で1つの村になる。そのため大きな郷，鎮，村というものが存在しない。市は第1区（現在の金河鎮），第2区（現在の勐拉郷），第3区（現在の銅場郷），第4，5区（現在の者米拉祜族郷・老集寨郷）で開催されている。市は6日ごとにたち，常設の市は存在しない。第4，5区の市（者米と頂青で開催）に集まる人びとは，最も多いときでも，200～300人を超えることはない。そして交易の形態は物々交換である」とある。

当時の市の規模は，おそらく現在の頂青でたつ市程度の規模であったと考えられる。今回の調査で露店とピーク時の人数の関係をみると，頂青を除く市では1店の露店におよそ4人という相関関係が抽出できたが，このことは市ごとに集まる人数には限界があり，露店数がそれに対応していると考えられる。頂青では1店あたりおよそ2人であるが，この数値を大きく下回る程度にしか人が集まらないと定期市の成立が難しくなり，反対に1店あたりの人数が4人を上回り，ある一定以上の数値に達すると定期市から常設の市へと変化していくのではないかと予想している。定期市の成立や常設市への変化は，「店と人数の適正規模」を考える必要があろう。

市のたつ条件として，これまで「余剰生産物の現金化と生活必需品の購入」「徒歩移動における限界性」「市ネットワークの存在と商人の介在」「商品作物の処理機能」の4つをあげた。新たに市のもつ特質に，「生産物の処理の自由度と技術の分担による製品の分業」「相互規制性による分業創出機能」と，「小商いの集合による商品数の創出と多様な選択性」を指摘した。さらに市の成立を考える上で，「交易品としての食料と食の楽しみ」と「店と人数の適正規模」にも目を向ける必要があると考えられる。

註

(1)——加藤繁「清代に於ける村鎮の定期市」『東洋学報』23-2，1936年。天野元之助「現代支那の市集と廟会」『東亜学』2，1940年。増井経夫「広東の墟市」『東亜論叢』4，1941年。

(2)——中心理論とは，クリスタラー（W.Christaller）が提唱した理論で，中心地点及びその補完区域からなる結節地域・市場圏の垂直的集合について論じたもので，具体的には，各上位市場圏は，すぐ下位の市場圏をいくつか含む階層的配列を示しているという学説のことである。

(3)——標準市場とは，農民が日常的に利用する市場のことである。スキナーによれば伝統中国では，標準市場が社会の中核をなしていたという。

(4)——中村哲夫は，中国における現代の市研究には2つの方向性があると整理している［中村1978］。それは「資本主義列強が中国市場へ進出するにあたり，いかなる回路を通じて開港場から農村への経済的支配を貫徹するのかという問題の解明に欠くことのできない研究対象である」「中国農村の農村研究に普遍的な分析視角を提示すること」に集約されるという。

(5)——市の調査は，科学研究費補助金（基盤B 15401037，平成15～18年度）『実践としてのエスノ・サイエンスと環境利用の持続性—中国における焼畑農耕の現在—』（代表，篠原徹）によっておこなった。者米谷の調査は，2003年3月11日～3月19日，同年8月25日～9月12日，同年11月5日～12月25日，2004年5月18日～6月15日，同年11月15日～11月22日の計5回にわたっておこなった。

(6)——者米拉祜族・老集寨郷は従来1つの郷であったが，1978年に者米拉祜族郷が独立し2つの郷に分離した。者米拉祜族郷の郷政府は者米におかれている。一方の老集寨郷は老集寨街に郷の政府機関が所在する。者米は漢語でジェーミーと発音し，タイ語の漢字表記である。本来はタイ語で「豊かな土地」という意味をもつ。

(7)——漢字表記は，それぞれ傣(タイ)，哈尼(ハニ)，瑶(ヤオ)，古聰(クーツォン)，阿魯(アールー)，苗(ミャオ)，壮(ジョワン)，哈備(ハーベイ)である。アールー族は，彝(イ)族の一支族であり，クーツォンは拉祜(ラフ)族の一支族である。本稿ではカタカナ表記で民族名を表記する。

(8)——中国では一般に県の下にいくつかの鎮及び郷がある。鎮及び郷はいくつかの行政村で構成されている。通常行政村はいくつかの自然村で成りたっている。ただし自然村という言い方は，中国研究者の慣用的な使い方であり，言葉の字義通りの意味で政治が関与せずにもともとあった村という意味ではない。

(9)——国家が公定する56の民族（漢族を含む）に含まれない民族。独特の言葉をしゃべり，かつては村内婚しかおこなわれていなかったという。金平県だけでなく，雲南省においてハーベイが居住するのはこの村だけだといわれている。

(10)——者米拉祜族郷では，1998年から「155工程」という「扶貧政策」が実施されている。1万人の貧困なラフ族に対して，5年間で5千人を貧困から脱出させるという政策である。貧困脱出の基準は，年間1人あたりのコメ(籾)などの穀物が450キロ以上，現金収入だと600元（2005年11月現在でおよそ8000円）である。具体的には，従来の焼畑で陸稲，キャッサバ，トウモロコシに頼っていた生業を，水田によるコメの自給と換金作物の植え付けを奨励するという政策である。そのため山地の水田の開墾が難しい場所から，村を移住させている。村の建設も政府の補助によっておこなわれている。さらに水田開墾とコメの植え付けの技術，道具類，肥料なども援助している。

(11)——螞蟥塘の市については，2004年10月29日におこなった調査データを使った。

(12)——以下述べる三棵樹，頂青，平河の市の分析方法も，者米でおこなった分類方法を基準にした。

(13)――服装や言葉から大半が漢族だと思われる。しかし何族かという質問に曖昧な返答しかしなかったため不明とした。
(14)――三棵樹の市については，2004年6月5日におこなった調査データを使った。
(15)――葉菜(5種)，葉菜(1種)，果菜(15種)，根菜(1種)，茎菜(2種)，芋(2種)である。
(16)――頂青の市の記録は，2004年5月27日におこなったデータを使った。
(17)――果実が6種，香辛料が4種である。野菜の種類は，27種で，果実が6種，香辛料が4種である。このうち野菜は，果菜(9種)，葉菜(9種)，茸(3種)，根菜(2種)，芋(2種)，花菜(1種)，茎菜(1種)の順になる
(18)――調査方法は調査者二人が男女それぞれを担当し，通りを素早く移動しながら滞留している人数を男女別に数えた（食堂で食事をしている人数は含んでいない)。市全体の人数を数え終わるのにおよそ5分程度かかる。そのため移動している買い物客を重複して数える欠点や，市から去っていく買い物客の人数を数え漏らす可能性は存在するが，およその傾向を把握するには支障がないと考えた。
(19)――平河の市については，2004年10月20日におこなった調査データを使った。
(20)――露店の歯医者は正式に医者を免許をもっているのではなく，道端に置いた机の上に入れ歯の見本や歯を削る道具，薬などを並べ，その場で歯を抜いたり薬を処方するなどの治療をおこなう。
(21)――果菜(22種)，葉菜(10種)，根菜(7種)，花菜(4種)，茎菜(4種)，芋(3種)，茸(1種)。
(22)――果菜(14種)，葉菜(7種)，根菜(7種)，花菜(1種)，茎菜(3種)，芋(1種)，茸(1種)。
(23)――未同定のため現地の漢字表記にした。
(24)――者米は乾季と雨季にたつ市の平均値。
(25)――平河の市は，通りに露店が並ぶタイプではなく，広場に店が出店する。そのため市での人びとの動きが複雑で，滞留人数を把握することが不可能であった。また頂青の場合は，調査当日雨が激しく降っており，これが客の出足に影響としたと考えらる。
(26)――老集寨郷から者米に来る山道は2本あるが，町の北側で者米川を渡る地点で合流する。そのためこの場所で老集寨郷から来るアールー族の人数を正確に把握することができる。
(27)――現在でもクーツォン族は，籐で編んだ籠とコメとを交易している。1950年代まで，クーツォン族は他の民族と沈黙交易をおこなっていたという。またハニ族とは，狩猟したイノシシなどの動物を，焼畑に必要なナタ，オノ，それに古着と交換していた［中国科学院民族研究所雲南民族調査組・雲南省民族研究所編 1963]。

引用・参考文献

天野元之助　1940 「現代支那の市集と廟会」『東亜学』2
天野元之助　1953 『中国農業の諸問題（下)』技報堂
雲南省金平苗族瑤族傣族自治県志編纂委員会　1994 『金平苗族瑤族傣族自治県志』三聯書店
雲南省緑春県志編纂委員会　1991 『緑春県志』雲南人民出版社
沖縄大学沖縄学生文化協会　1982 「那覇市第一牧志公設市場調査報告」『郷土』20号，沖縄大学
加藤繁　1936 「清代に於ける村鎮の定期市」『東洋学報』23－2
黒田明伸　2003 『貨幣システムの世界史―〈非対称性〉をよむ―』岩波書店
スキナー，G.W.　今井清一・中村哲夫・原田良雄訳『中国農村の市場・社会構造』法律文化社，1979年
中国科学院民族研究所雲南民族調査組・雲南省民族研究所編　1963 『雲南省紅河哈尼族彝族自治州金平県苦聴人社会経済調査』(発行不明)
中村哲夫　1978 「清末華北の農村市場」野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史』二，東京大学出版会
西谷　大　2005a 「市のたつ街―交易からみた多民族の交流―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集
西谷　大　2005b 「雲南国境地帯の定期市―市の構造とその地域社会に与える影響―」『東洋文化研究所紀要』第147冊
増井経夫　1941 「広東の墟市」『東亜論叢』4
B・マリノフスキー，J・デ・ラ・フェンテ著（信岡奈生訳，黒田悦子解説)『市の人類学』平凡社

(国立歴史民俗博物館研究部)
(2005年5月17日受理，2005年7月15日審査終了)

Why is a Market Established? : The Example of Regular Markets on the Border of Yunnan Province

NISHITANI Masaru

The aim of this paper is to discover the conditions needed universally for the formation of a market and its essential qualities. It does this using the examples of markets held along the roadside every six days in Jingping County and Luchun County in Honghe Prefecture in China's Yunnan Province.

The author has previously established four conditions for the formation of a market. These are: 1) The selling for cash of surplus produce and the purchase of daily necessities; 2) the limitations of travel on foot; 3) the existence of a market network and the mediation of vendors; and 4) the capability to process produce. This paper adds two more essential qualities for a market. They are: 1) the creation of a number of products and a diverse choice as a result of the congregation of small vendors; and 2) freedom in the processing of products and the creation of a division of labor for making products caused by the division of technology. Two other elements deserving of attention when studying the formation of a market are: 1) food as commercial goods and the enjoyment of food; and 2) the appropriate level of shops and number of people.

It is well recognized that the emergence of commercial activities in the history of mankind came about due to the exchange of goods between different groups who had different products arising from differences in lifestyle and the ecological environment. Research into regular markets in the Zhemigu region (者米谷地域) where nine ethnic groups with different languages, customs and produce live in the same valley provides us with important clues when considering conditions for the birth of markets within the history of mankind and the process by which markets are formed through trade between different ethnic groups.

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol. 130 March 2006

集市出现的原因－以云南边境地区的集市为例－

西谷　大

本稿的研究对象是每隔六天在中国云南省红河州金平县和绿春县的集镇里出现的定期集市。本稿的研究目的是探寻集市形成的普遍条件以及其特质。

到目前为止，关于集市的形成的条件的论述大致可以归纳成以下四点：第一，剩余产品的现金化和生活必需品的购入；第二，徒步可移动的距离的局限性；第三，集市网络的存在和商人的介入；第四，出售经济作物的功能。在此基础上，本稿又增加了以下两点，即“由小商贩推出的商品种类及其多样的选择性”和“出售产品的自由度和以技术分工为基础的产品的分工生产”。进而言之，在考虑集市成立的条件时，“作为交易品的食物和饮食的乐趣”以及“店铺和规模适当的人数”这两点也不容忽视。

不断有研究指出，在人类历史上，交易活动的出现，起因于生业以及所处生态环境不同的集团之间的物资交换。在考虑“人类历史上集市出现的条件”和“源于异民族间交易的集市的诞生过程”等问题时，这一以居住于者米山谷一个山谷的语言，习惯，产物等都迥然不同的 9 个民族为对象的定期集市研究将提供重要的线索。

写真１　螞蟥塘の本通の雑貨店。左からハニ・ヤオ・ミャオ族の女性

写真２　螞蟥塘。キャッサバの仲買

写真３　螞蟥塘。ミャオ族の野菜を販売する露店

写真４　三棵樹。さまざま商品を売る露店が混在して並ぶ。

写真５　三棵樹。ミャオ族の野菜を販売する露店

写真６　三棵樹。ハニ族。市に薪を売りに来ている。

写真 7　頂青。肉売り場

写真 8　頂青。野菜を売るアール一族とハニ族

写真 9　頂青。ライチを買うタイ族

写真 10　平河。北市広場の様子

写真 11　平河。東市通り北側。野菜を売るハニ族

写真 12　平河。北市広場の食堂

写真 13　者米。ラッキョを売るクーツォン族

写真 14　者米。野菜を売るアール一族

写真 15　者米。市で無地の綿布を売るタイ族

写真 16　者米。藍で染めた布をアール一族に売るハニ族

写真 17　者米。肩紐のない背負い籠を売るハニ族

写真 18　者米。籐で編んだ肩紐を売るクーツォン族の夫婦

写真 19　者米の町。周囲の山の上にある村から市に人が集まってくる。

写真 20　者米。ブタ肉の煮込みをのぞきこむ家族

写真 21　三棵樹。食は市での楽しみのひとつ